



# なまず

2002年5月6日発行 [第12号]

震災・まちのアーカイブ発行

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町

1丁目11-4 神港金属(株)内

Tel 078-681-6231 Fax 078-681-6232

E-mail archives\_kobe@nifty.com

発行人/季村範江 編集人/菅 祥明

【記憶の分有をめぐる】

## 記憶の聖なる次元

細見 和之

記憶が現在と関わることは繰り返し論じられてきた。人間にはすべての出来事を記憶することはできない。それはたんに個人の記憶のみならず、集団的な記憶についても同様である。どんなに容量の大きな記憶の装置にも、いっさいを書き込むことはできない。記憶には当然ながら、選択や強度、濃淡などのフィルターが介在し、さらには因果関係の選別という要因も働かざるをえない。したがって、なにをどのように、どのような因果関係において記憶するのか、そのことがあらゆる事柄において問われることになる。

九・一一の事件に際しても、「パールハーバー以来」ということがしきりに語られたが、合衆国の「国史」においては、広島・長崎への原爆投下は日本による「真珠湾攻撃」の帰結であって、一般に日本で理解されているように、原爆投下を戦後におけるソ連との冷戦への布石と見なすのは、合衆国では悪しき「修正主義」と呼ばれる。そして、その合衆国の「国史」がどのように危険な現在と結びついているかは、言うまでもないだろう。

日本では一九九〇年代後半、「新しい歴史

教科書を作る会」の登場とともに、新たに歴史と記憶をめぐる議論が噴出した。「記憶の内戦」という言葉すら語られた。実際、なにをどのように、どのような因果関係において記憶するのか、という問題は、現実の内戦と大きく関わっているし、逆に現実の内戦が新たな記憶の布置を作り上げもする。それまで平穏に暮らしていた隣人が突如として数世紀来の不倶戴天の敵として表象され、残忍な殺戮の対象となる……といった事例は、ここ数年のあいだにも繰り返し見られた。

だからこそ、なにをどのように、どのような因果関係において記憶するのか、という問題は切実であるし、たんに過去のこととしてではなく、現在のために、そしてさらには未来のためにこそ、記憶が継承されねばならない、と語られるのだ。

しかしじつは、ぼくはこのような「記憶の政治学」に疑念を持たざるをえない。ぼくは、現在や未来のためではなく、あくまで過去は過去のために記憶されるべきだ、と思う。もちろん、「もっぱら過去のためにのみ記憶された過去」と称されるものが、じつは現在お

よび未来の利害関心によって大きく歪められている可能性を持つこと、そのことに対しては充分自覚的でなければならないだろう。そのことへの省察を促すという一点で、「記憶の政治学」の視点は貴重である。にもかかわらず、「現在と未来のためにこそ」という眼差しを持ち込んだとたんに、その記憶は「有用性」という現在の身勝手な都合を懐胎し、それによってその記憶には、ある種の退廃の契機がもたらされるのではないかと、とぼくには思われるのだ。それは記憶の相対化のみならず、記憶のニヒリズムにも行き着く可能性を孕んでいるのではない。

たとえば映画『ショーア』に登場する証言者たちは、いったいなんのために「証言」を行っているのか。語ること自体が苦痛であり、「ショーア」(ホロコースト)について証言することは、あの言語を絶した出来事を意識のなかで反復することに等しい、と言われる。にもかかわらず、彼ら、彼女らは、なんのために証言するのか。二度と「ショーア」(ホロコースト)のような出来事が起こらないために、というのが一般的な答えであり、証言者自身も問われればそのように答えるかもしれない。しかし、スクリーンにおける彼ら、彼女らの証言は、そのような未来にとっての「効用」とはおおよそ異質な次元においてなされている、とぼくには思われるのだ。

彼ら、彼女らは、決して起こってはならない出来事が二度と起こらないために証言しているのではなく、起こってはならない出来事が現に起こってしまったがゆえに証言しているのではないだろうか。この二つを決して混同してはならない、と思う。「証言」に際して彼ら、彼女らの意識は明らかに、よき未来や

現在ではなく、過去の出来事の方を向いている。証言はあくまで、その当の出来事のためになされるのだ。すべての証言者は、まさしくそのために孤独なのだ。

映画『ショーア』にそくするなら、たとえば、トレ布林カで抑留者たちをすし詰めにした貨車が絶滅収容所へ引き込まれる際、機関車が貨車を押していたのか引いていたのかを、ランズマン監督が確認する場面がある。いや、確認するというより、トレ布林カの元機関手が「二〇両の貨車が私のまえにあった」と語ったその言葉に、自らインタビューしていたランズマンが不意を突かれるのである。監督も鑑賞者であるわれわれも、機関車は列車を引くものだと思っている。ところが、トレ布林カでは押していたようなのだ。このような細部は、現在と未来のための記憶という観点からは、およそ意味をなさない、と思われるのではないだろうか。どのような「教訓」もそこから引き出すことは不可能だろう。にもかかわらず、これは大事な証言だ、という印象が、観る者には押さえがたく湧いてくる。あるいは、どこから収容所の敷地が始まっていたのかを確定しようとするランズマンの振る舞い……。そのような箇所はそれこそ枚挙に暇がない。

『ショーア』にかぎらず、「証言」とはそもそもこのような細部の積み重なりであって、「現在や未来のための記憶」という観点のもとでまずもって失われるのは、このような細部ではないだろうか。ただしそれは、細部をまちがって記憶してはならない、という強迫観念とは別である。それは、過去の出来事にさらに厳密に目を向けよ、という合図であって、教訓化の遥か手前で、ぼくたちがそもそ

も肝心の出来事そのものを理解していない、という省察へとぼくらを向かわせる索引である。そしてそこには、ほかならぬショアの ような理不尽な大量殺戮をふくめて、過去の出来事の持つ「神聖性」という否定しがたい契機が存在している、とぼくには思われるのだ。

あらゆる記憶にそなわっている、この聖なる次元——。それはぼくらを戸惑わせるかもしれない。ぼくらはおそらく、形而上学的とも言うべき記憶のこの聖なる次元にいまさら

のように戸惑って、「現在や未来のための記憶」などと口にしてしまうのだ。にもかかわらず、芸術家や学者にかぎらず、およそ過去と向き合うひとびとはすべて、この次元のことをよく理解しているはずである。あたりまえの話だが、未来の教訓などのために過去の出来事は存在したのではないのだ。過去は過去それ自身のために想起されねばならない。あえて言えば、それこそが、事後を生きる人間の「使命」であるだろう。

[ほそみ・かずゆき／大阪府立大学教員]

## 【活動報告】

### 「アーカイブ」が助成金交付団体に選定される

毎日新聞社と毎日新聞社会事業団が阪神大震災の被災地などで活動するボランティア団体を支援するため創設した「阪神大震災ボランティア・サポート制度」の02年度分の選考委員会が

#### 震災ボランティア支援

このほど開かれた。申請44団体の中から次の10団体が支援対象団体に選ばれた。

作家、陳舜臣さんから寄付された「神戸ものがたり」（平凡社）の印税金額や読者からの寄金を基に98年発定。震災10年

#### 対象10団体決まる

の04年度まで毎年、10団体に1団体30万円を資金支援する。姫路ごころのケアネットワーク（兵庫県姫路市）▽神戸西・助け合いネットワーク（神戸市須磨区）▽怒者ごころ菜しみ隊（同）▽福祉ネットワーク西須磨だんらん（同）▽神戸定住外国人支援センター（神戸市長田区）▽震災・まちのアーカイブ（同）▽まち・コミュニティジョン（同）▽震災語り部グループ（神戸市中央区）▽ひょうご福祉ネットワーク（同）▽ボランティアネットワーク「スキップ」（大阪府吹田市）

この度、私ども「震災・まちのアーカイブ」は、毎日新聞社と毎日新聞社会事業団による「阪神大震災ボランティア・サポート制度」の支援対象団体に選ばれました。これは、過去の実績と今後の活動計画などから審査が行なわれたもので、最長3年間の資金支援が実施されます。

会員の皆様からのご支援とともに、これら助成金をもとに今後も粘り強く活動を続けて行こうと思います。概して民間団体を取り巻く状況には厳しいものがありますが、これからも「震災・まちのアーカイブ」をよろしくお願いします。（左記事は、「毎日新聞」より抜粋）

なっている様相を中村さんは報告する。この闇を内務省警保局外事部文書などを引用しつつ、やわらかなタッチで明らかにさせた視点は白眉であろう。

安井仲治らの写真、中村綾乃さんの言葉は、杉原ビザで神戸へたどり追いた人びとの滞在を巡るものだが、神戸から上海へ移動したユダヤ人のその後について、昨年急死した西井一夫が「幻の満州ユダヤ人自治区—対米融和の駆け引きの陰で」[註13]で看過できない出来事があったことを報告している。

1941年4月に始まった上海への移動は11月には終わった。明るる1942年7月、ハインリッヒ・ヒムラーの指示を受けたアジア地区ゲシュタポ司令官ヨゼフ・マイジンガーが日本領事館に現われ、上海での「ユダヤ人最終解決案」を示した。そこに三つの具体案があった。ひとつ。9月1日のユダヤ暦正月にシナゴークに集まるユダヤ人を捕縛、黄浦江の廢船に收容、東シナ海海上へひき出し放置、餓死したところを日本海軍が砲撃撃沈。その二。ユダヤ人を上海郊外の岩塩鉱山に移動させ強制労働させる。その三。揚子江河口に新たに收容所をつくり、そこで生体実験。ところがこの案は領事館員柴田貢の内部密告により事前に潰えた。挫折させたのは、松岡洋右、安江仙弘ラインではなかったかと西井氏は推測する。松岡洋右には対米戦争回避という政治性があり、その松岡を取り巻く人間群（日産コンツェルンの基礎をつくった鮎川義介、高橋是清、石原莞爾、岸信介、樋口季一郎、板垣征四郎、犬塚惟重）は、皇道派、統制派の対立抗争とも絡みながら複雑に展開していた。対米融和の内容は河豚計画[註14]に基づくルーズベルト大統領側近の

スティープン・S・ワイズとの政治工作だったが頓挫している。なお極東国際軍事裁判で松岡はA級戦犯で起訴されるが公判中に死亡。安江は敗戦後シベリア抑留、1950年ハバロフスクで死去。西井氏によれば、彼等の検証は不可避の課題とされる[註15]。

以上が、上海移動後の未遂の出来事だが、軍部がナチスの求める最終解決案を実行していたなら、シンドラーズリスト日本版と呼ばれる杉原ビザの物語の感動など、一挙に潰えさるだろう[註16]。

震災後、何気なく異人館の周辺を歩く。観光客は以前と変わらぬくらいに戻ってきたのだろうか。神戸は舶来文化が似合う街といわれる。そのことを多文化共生の実践と胸をはって呼ぶことが出来るだろうか。北野坂、山本通りには、モスク、ギリシャ正教寺院などのさまざまな宗教建築[註17]がある。シナゴークはその一つに過ぎない。異なった宗教の流入、だがそれすらも表層的な風景として受けとめ、街が背負う歴史をほとんど省みないのがこの街の流儀のようだ[註18]。

カウナスから神戸へ、そして上海へ移動した人影が、いま曲がって来た小道から、じつとこちらを見つめているとしたらどうだろう。手塚治虫の『アドルフに告ぐ』[註19]が、まさにそのような視線に貫かれているとしたらどうだろう。「無関心という悲劇」が問題となる現在、日本軍がユダヤ人を乗せた船を撃沈していたとするなら、という夢想を誰もあざ笑うことは出来ない。ある日、手塚治虫の父が撮影した放浪するユダヤの人びと。撮影という行為の偶然性に潜む出会いの意味に、私は戦慄を禁じえない。異なった時間の遭

遇。異文化との不意の出会い。死者と生者の往還。戦慄は、先ごろ目にした四方田犬彦氏の「李香蘭と朝鮮人慰安婦」の中の次のつぶやきに絡みつく。

【年だってほとんど違わないのに、同じ場所に居合わせている一人がスターで、もう一人が慰安婦だなんて、どうしてこんなことがありえたのでしょうか。わたしはその人のことをついこないだまで、何も知らなかった。けれどもその人はわたしのことを、ずっと考えていたのです。あの時の梅の花が造花だということを。わたしが戦争を憎むのは、このためです。】【註20】

こちらは何も知らないで通り過ぎたが、向こうの他者はずっと憶えていて、記憶の場所でうずくまっている。同じ場所だが、現在というそこに、過去が流れこむ。地名にひそむ記憶。同じ場所だが、違った時間が溜まっている。歩いていて、歩みをとめ、ふと佇む。すると時間の色彩が微妙に変化しているのに気づく。そのときの風。頬に感じる風のなかの記憶。時間は重層的である。風のなかに、何を聴くのか。立ち止まりながら、その重層性をどう読み取るのか。中村綾乃さんは、震災に関して一言も語っていない。だが兵庫県生まれの彼女が、そのことをまったく意識していないとは私には到底思えないのである。

最後に、杉原千畝や樋口季一郎らの、人道的見地からの亡命ユダヤ人支援が、言説として流布されるや否や帯びるもう一つの政治性について語っておきたい。忘失という政治性に関してである。

ユダヤ人支援は、対米戦争回避という、軍

部の明らかな政治性にに基づいている。ところが支援の一角を担ったことを、戦後の私達が語りだすや否や、もう一つの政治性が生まれる。記憶の隠蔽である。日本と朝鮮との記憶が隠蔽される。亡命ユダヤ人が神戸におしよせていた頃、朝鮮半島からいったい何人の人びとが母語を奪われ、日本列島に移動していたことか。大東亜理念遂行という戦争に、蔑視された彼等は、どのように繰り込まれていたのか。海峡を渡って来た異文化に、私達はどのように接してきたのか。三鬼の『神戸』にも、アパートの住人に、敗戦時の天皇の放送を聞いて慟哭したナオミという、朝鮮出身をひた隠しにしていた女性のことが書かれてあった。記憶の隠蔽という政治性は恐ろしい。とかく救済、癒し願望の強い私達は、杉原ビザにまつわるユダヤ問題を、美しい物語に祭りたて語りたがるが、そのことで隠蔽されるもう一つの政治性に今後どう自覚的にとり組むのか。神戸に移動した亡命ユダヤ人の解説は、明治初年以降の朝鮮との関係を通したときのみ、問題の端緒に立てることを改めて提議しておきたい。

【震災・まちのアーカイブ会員】

註1、中村綾乃論考は『語り伝えよ、子どもたちに』（S・ブルックフェルド／P・A・レヴィーン、高田ゆみ子訳、高橋哲哉解説、2002年2月、みすず書房）の中にある。

2、杉原ビザに関しては、渡辺勝正著『真相・杉原ビザ』（2000年）、杉原幸子監修、渡辺勝正編著『決断・命のビザ』（1996年）、いずれも大正出版、この二冊が詳しい。

3、コスモポリタンと呼ばれる西東三鬼（1900—1962）の生涯は風変わりだ。大正14年、25歳のとき赤道直下の英領植民地昭南（シンガポール）に渡り、歯科医開業、ゴルフ三昧の日々を過ご

したことなどほんの一部である。引用句は、『現代俳句』(昭和15年6月・河出書房)第三巻に収録された「空港」にあり、昭和13年頃の神戸をうたったものと思われる。

4、神戸とドイツとの関係は、明治維新後の兵庫・大阪ドイツ帝国領事館から始まる。日露戦争後の1909(明治42)年には、神戸ドイツ学院設立。菓子舗の「ユーハイム」「フロインドリーブ」などは第一次世界大戦後、日本に連行されたドイツ兵らが起す。また神戸にはユダヤ教の会堂であるシナゴーク、体を洗い清めるためのミクベ(沐浴斎戒用槽)やショヘット(家畜屠殺人)、モヘル(割礼執行人)もいた。神戸のユダヤ人コミュニティは1881(明治14)年帝政ロシアで始まるポグロム(ユダヤ人に対する組織的略奪、虐殺)から逃れた人びとが主な構成員。「神戸ユダヤ人協会」は1915(大正4)年に設立。神戸ユダヤ人協会のアシュケナージ派がカウラスからの亡命避難民支援を行った。ゾラフ・バルハフティク『日本に来たユダヤ難民』(滝川義人訳、原書房、1992年)、152-165頁。岩野裕一『王道楽土の交響楽—満州、知られざる音楽史』(1999年、岩波書店)27頁参照。

5、トーアロードは東亜道路。海岸沿いの居留地から山の手、北へ伸びる一本道。中井久夫氏によれば、この道の和名はないとされる。

6、海を見下ろす諏訪山動物園は今はないが、増村保造監督、市川雷蔵主演の映画「陸軍中野学校」にも日常の中の不思議な異空間として出てくる。

7、宮澤正典氏の「神戸におけるユダヤ避難民」(小岸昭氏主宰日本・ユダヤ文化研究会「ナマール」創刊号、1996年7月)の掲載資料によれば、西東三鬼が滞在する以前、フジホテル(富士ホテルとあるが)、東亜アパートに、亡命ユダヤ人が泊まったらしい。宮澤氏には他に『日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録、1877-1988』(株式会社新泉社、1990年)がある。

8、「続神戸」は、『天狼』に昭和34年8月号から連載。

9、帝政ロシアが開いた人工都市ハルビンについては、樋口覚『昭和詩の発生』(1990年、思潮社)の「註によるデッサン」(153頁-175頁)に、

新井白石、間宮林蔵からチェホフ、廣松沙まで参考にするべき文献リストが掲載されている。山口昌男『「挫折」の昭和史』(岩波書店)、川村湊『異郷の昭和文学』(岩波新書)、『満州崩壊』(文藝春秋)、黒川創編『満州・内蒙古ノ樺太』(新宿書房)なども重要なテキストである。

10、「神戸」は、『俳句』に昭和29年9月号から連載。

11、安井仲治は1903(明治36)年大阪生まれ、戦前のモダニズム写真の興隆期を語るとき欠くことのできない人。昭和17年神戸市御影で38歳で死去。写真のみならず、西鶴、芭蕉などに触れた文章も味わい深い。『日本の写真家9 安井仲治、飯沢耕太郎序文、資料篇中島徳博』(岩波書店)

12、前掲バルハフティク『日本に来たユダヤ難民』に、当時ヘブライ語聖書を研究していた小辻節三が難民救出交渉に尽力した様子が描かれている。小辻は大連特務機関長安天仙弘大佐の命を受けての来神だった。なお小辻らのヘブライ語研究会グループを背後から支えた三笠宮の存在も今後の検証課題であろう。156-157頁。

13、西井一夫責任編集『シリーズ20世紀の記憶』(毎日新聞社)の第2期4回目の配本「大日本帝国の戦争1、満州国の幻影」(1999年刊)の中に収録。他にこの巻には中川秀恭氏によるハイデッガーの弟子ユダヤ人哲学者カール・レーヴィットの思い出や草森紳一氏の馬賊論、新発掘の満州の写真など多数収録され、資料価値は高い。

14、フグは美味だが、料理方法を間違えば毒にあたるという意味からか、満州国へのユダヤ資本導入、ユダヤ人の移住計画という「フグ計画」なるものがかつてあった。立案者の鮎川義介、松岡洋右らの出身地がフグ特産地の長州というのも命名理由か。『河豚計画』(マービン・トケイヤー、メアリ・シュオーツ共著、加藤明彦訳、1979年7月、日本ブリタニカ株式会社)参照。西井論者もこの本に依拠したものと思われる。孫文と係わりの深かったマイケル・コーガンが神田の古本屋で発見した所謂「コーガン文書」(満鉄、外務省機密文書)について、毎日新聞社を退職した西井氏を吉野山にたずね、お聞きしたかったが永遠に叶わぬことになった。封切りの

近い河瀬直美監督『追憶のダンス』は、西井の吉野の村での最後の日々を追っている。また轟沈といえば、脱出するユダヤ人を運んだ「はるびん丸」「天草丸」は、ベトナム、台湾沖合いで撃沈され消滅している。

15、安江仙弘は未だに遺骨収集もできないまま、ハバロフスクの日本人墓地で眠っている。平凡社の創立者、中下彌三郎は公職追放解除後、自ら委員長となり、1954年青山斎場で安江の慰霊祭を行っている。

16、石原莞爾、辻政信らを巡る満州国の夢を漫画で描いた作品に安彦良和『虹色のトロッキー』（初出月刊「コミックトム」1990年11月号—1996年11月号連載、のち潮出版社、全8巻）がある。満州に関する資料『東亜連盟』（復刻版）全17巻、柏書房）を編集した小林英夫氏と安彦良和氏との対談（1996年12月7日、図書新聞）参照。

17、中井久夫氏「神戸の光と影」（岩波書店「へるめす」1985年3月号、のち『記憶の肖像』1992年、みすず書房、114頁—146頁）。『近代日本と神戸教会』（1992年、創元社）の笠原芳光氏「風土・時代・人間」参照。

18、三鬼は「俳愚伝」のなかで、神戸という街は

「頭骸骨の要らない街」といってもよい位、物を考えないでいられる、と痛烈な言い方をしている。（『冬の桃—神戸・続神戸・俳愚伝』1977年、毎日新聞社）275頁。

19、手塚治虫『アドルフに告ぐ』に登場する、アドルフと呼ばれる二人の少年。一人はアリアン人優勢思想に依拠するドイツ人。もう一人はアシュケナージ。二人が駆け巡る戦時下神戸の光景は不思議だ。中野晴行『手塚治虫のタカラヅカ』『手塚治虫と路地裏のマンガたち』（いずれも筑摩書房）参照。

20、「李香蘭と朝鮮人慰安婦」は、四方田犬彦編集『李香蘭と東アジア』（岩波書店、2001年、196頁—197頁）。そこに収録される岩野裕一氏の『私の鷲』と音楽の都・ハルビン』は、満州を日本の音楽史のもう一つの故郷としてとらえ、満州映画協会理事長甘粕正彦を取り巻く人間関係を浮かび上がらせ興味深い。前掲岩野『王道楽土の交響楽』には、来日し宝塚歌劇に影響を与えたエマヌエル・メッテルと朝比奈隆や服部良一、小澤征爾の父小澤開作、叔父小澤静と満州医大交響楽団、加藤登紀子の父幸四郎とハルビン特務機関との係わり、満州電電のアナウンサーだった森繁久弥のことなどが縦横に論じられている。

## 「震災・まちのアーカイブ」2001年度会計報告

(2001年4月1日～2002年3月31日)

収入の部		支出の部	
カンパ	123,545	コピー機借料	34,650
前年度繰越金	216,431	パソコン用品	27,516
冊子売上げ	36,980	通信費	37,720
謝礼	5,000	用紙代	26,155
雑収入	1,970	謝礼	19,800
利子	22	資料購入	4,956
		事務用品	10,900
		ブックレット制作費	23,205
		雑支出	6,953
		小計	191,855
		次年度繰越金	192,093
計	383,948	計	383,948

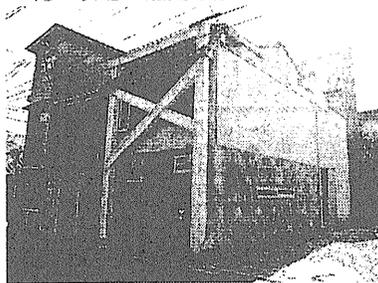
現在ニューヨークで「Renewing, Rebuilding, Remembering (再生、再建、記憶)」と題された展覧会が開催されている(28日まで)。この展覧会は、近年大きな災害や事件に見舞われた世界の7都市を対象にして、各都市がどのように復興し、また出来事記憶をどうめようとしているかを、建築や美術作品を通じて検証するものである。対象都市は、ベルリン(「壁」の崩壊)、ハイリュート(戦争)、マンチェスター(テロ事件)、オックスフォード(テロ事件)、サンフランシスコ(大地震)、サラエボ(戦争)、そして神戸(大地震)。昨年のニューヨークで同時多発テロ事件をきっかけにして、公共空間のデザインなどを手がけるアメリカのNPO、パン・アレン協会の主催によって開催されている。

## NYで都市の復興と記憶の展覧会

この展覧会の神戸部門の展示「作品」の選定に協力した。私が協力する以前に主催者側が候補を挙げていた神戸の「作品」には、行政による施設が多かった。しかしそれでは震災後の現象を十分に示す



⑤「Renewing, Rebuilding, Remembering」の展覧会場風景 ⑥兵庫県宝塚市の「ゼンカイ」ハウス 一撮影は筆者



# 神戸が最も多様な現象

ここができたと判断し、個人の活動を中心にいくつかの「作品」を随筆例に紹介し、その結果神戸部門では、

宮本佳明氏設計の「ゼンカイ」ハウスは、地震で全壊の心情を表している。南戸屋 兵団地では、建築家や美術家を、修復によって再生させた家と住民が協力していくか、都市も復興の出来事を記憶に

現象なのかもしれない。しかし神戸では、人と防災未来センターをほじめて、その内容が十分検討されないまま安易に多くのメモリアル施設が作られているのが現状である。オクラホマシティでは、国際コンベンションテロ事件のメモリアル施設の設計案が選定されるなど、その決定過程はオープンなものに決まっている。出来事を記憶するための活動に対する姿勢の違いを感じる。

とめるあり方が異なっており、興味深い。ベルリンでは話聞発の情報

現在、ニューヨークの世界貿易センタービルの跡地では、犠牲者を追悼する仮設の碑や、行方不明者を知らせる掲示板が目立つ。跡地をどのようにするかの議論も生じている。出来事記憶のために共有し、形象化するが問われている。



笠原 一人

早く作られた。サラエボでは被害を受けた66年をオリンピックの屋内競技場や国立図書館の修繕作業が目立つ。ベルリンでは戦争を廃絶と

今後ニューヨークが、展覧会で示された他の都市の復興と記憶の仕組み方をどのように受け止め、反映させていくのか注目される。それは同時に、我々の課題でもある。

### 安易にメモリアル施設：も実状

阪神・淡路大震災特有の現象を内包した様々な「作品」が展示されることになった。

建築家・坂茂氏設計の「紙」の教会は、紙管を骨格とした仮設的構造体として作られた仮設的集合施設である。多数のボランティアの手によってセルフレッドで建設された。また

ものである。修繕の表現の認の美術作品がとられ、變化した街に複数のオアシスを立てる計画に興味深い。また神戸が最も多様な現象を具現しており、さらに他の都市に比べてメモリアル施設が多い、市史

若槻維大助手、建築史、都市史

## ある集いに参加して

季村 範江

阪神大震災の記録化の方法論を巡って、活動内容も専門分野も異なるグループや市民が一同に会して議論する試みがありました。参加者の一人として以下レポート致します。(後註参照)

呼びかけ人は、神戸大学を拠点に活動している「歴史史料ネットワーク」。私達「震災・まちのアーカイブ」も、震災一次時資料の収集保存に携わっている関係で、昨年、一昨年「阪神・淡路大震災をどう伝えるか」というフォーラムに係わってまいりました。

冒頭神戸大学の奥村弘氏から、今回の意味、趣旨説明がありました。要約すると、震災の記憶と記録の問題の重要性の再確認、震災の記憶と記録の問題を立場の違ったグループが交流・共有できる場所をどう作るか、そして記録化の方法論を立場の違ったグループが交流し議論しながら模索してゆく、以上のようなものでした。

歴史学、民俗学、心理学、社会学、建築学などさまざまな分野に携わる人が初めて顔を会わせたという事が意義のひとつだったと思います。それぞれのグループが、どういう契機で立ち上がったのか、そして現在何を考え、今後何を担おうとしているのかが、「記録」という言

葉を通して少しは鮮明になったと思います。

阪神大震災をどう語り継ぐのか。どう受け止めるのか。その方法論を巡る第一歩が、こうして始まったこと、お互いの違いを認めながら、じっくりと時間をかけ継続して取り組んでゆくことが必要で、今回の試みがどのように定着するのか、参加者一人ひとりの主体的な姿勢が問われているように思えてなりません。

〔震災・まちのアーカイブ会員〕

註1：2月17日(日) 神戸大学文学研究科会議室にて「阪神・淡路大震災の資料保存と記録化に関する研究会」が開催された。

註2：参加したのは、地元で活動する震災の語り部「グループ117」、「震災犠牲者聞き語り調査会」、「震災・まちのアーカイブ」、神戸大学で震災研究に携わっている室崎益輝氏、岩崎信彦氏、及び阪神・淡路大震災記念協会の佐々木和子氏、京都工芸繊維大学助手で建築史・都市史が専門の笠原一人氏、県政資料館の住吉氏など多彩な顔ぶれでした。また神戸以外から、災害の慰霊・供養・鎮魂に関して民俗学的研究をされている蘇理剛志氏、国立歴史民俗博物館に属し災害プロジェクトに関わっている寺田匡宏氏、社会学の立場から戦災と災害を研究されている山本唯人氏らが参加されました。

### ■お知らせ

○本年3月で設立4周年を迎えた「震災・まちのアーカイブ」では賛助会員を募集しています。会員になられた方には、「瓦版なまず」、「なまザブックレット」等の各種刊行物、読書会・研究会の案内をお届けします。年会費は1口1000円。1口以上おさめていただいた方には、会員登録をさせていただきます。振り込み先は、郵便振替 00920-2-125759、「震災・まちのアーカイブ」までお願いします。○また、震災一次資料の保存・整理・公開に関心をお持ちの方は、是非活動にご参加ください。活動日時は、第1・3木曜日と第2・4土曜日の10時から17時です。来室を希望される方は、なるべく事前にお電話でご連絡をお願いします。●「震災・まちのアーカイブ」ではホームページを開設しています。所蔵資料のデータを公開するなど、充実したコンテンツでアクセスをお待ちしています。ホームページ単独企画も掲載中！是非「お気に入り」に登録を。(URL)[http://homepage2.nifty.com/archives\\_kobe/](http://homepage2.nifty.com/archives_kobe/)

■ご協力くださった方々 (2001年12月～2002年4月、敬称略)

カンパならびに年会費をいただきました。ありがとうございます。

若原キヌヨ 岩崎信彦 芝村篤樹 栗原彬  
室崎益輝 阿部安成 たかとう匡子 片岡法子  
北川幸三 匿名希望

—— 今年度もご支援、よろしく願い致します。 ——

【編集後記】

今年の3月に沖縄へ行ってきた。観光ではなく、かの地にルーツを有する自身の先祖に会う旅として。◇案内してくれた大伯父がウチナーの言葉を教えてくれた。「生まりいいん」。沖縄では焼物が誕生することをそのように言うらしい。「釜から出すまではどのようなものに仕上がるか分からないから」とのこと。まさに人のそれと同じではないか。「生まりいいん」、3月ですでに25度を超す那覇の街を歩きつつ、何度かその言葉をつぶやいた。◇そして4月末、阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」がオープンした。かつて“メモリアルセンター”という仮称が付いていた施設である。以前に本誌でも特集を組んだ通り、数々の問題点がそこには指摘されている。はたして人と記憶を結ぶ空間が生まれたのでしょうか。次号で詳しいレポートをお伝えする予定です。 [S]

訃報

4月13日(土)、朝日新聞大阪本社学芸部記者の井上平三氏が亡くなりました。亡くなる寸前まで井上氏は闘病体験を「がんを生きる」という表題で書きつづけていました。また、震災を体験した記者として、震災報道にも並々ならぬ熱意と使命感をお持ちでした。

アーカイブ発足当初、私達の事務所にいくたびも足を運ばれました。ある時「記録を残すなら、震災後何を考え、何を思っ生きてきたかという人びとの声を残すことが大切だと思います。」と言われ、私達の活動に共感を示して下さいました。

以来、いつお会いしてもご自分の身体の苦しきなどおくびにも出さず、淡々としかもにこやかな振る舞いで、その様子が返って新聞記者の気迫を感じさせられました。病と闘いつづけた井上氏の存在に、どれほど励まされ、力をいただいたことか測り知れません。

そのまなざしは常に市井の人の小さな声に向けられていました。

ご冥福を心からお祈りいたします。

震災・まちのアーカイブ代表  
季村 範江

瓦  
版

# なまず

13

2002.Jul

臨時特集—「人と防災未来センター」



[発行] 震災・まちのアーカイブ

## □特集にあたって

2002年4月27日、神戸市中央区脇浜に阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」がオープンした。1期および2期からなるこの事業のうち、今回は1期施設のみが開館し、2期施設は2003年春にオープンの予定である。

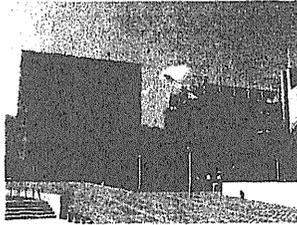
1期施設は「震災の経験と教訓を後世に継承し、国内外の災害による被害の軽減に貢献する」ためのものであり、2期施設は「いのちの尊さ、共に生きることの素晴らしさ」を体験することがその目的となっている。

約60億円の公費(国と兵庫県の折半)で建てられた1期施設に関しては、これまでも問題点が指摘され、「瓦版なまず」においても2度特集が組まれた。それは、伝わってくる情報からも、この施設が震災の記憶を継承し、数多くの記録を保存・活用するに相応しいとは思われなかったからである。

そしてオープンの日を迎えたのだが、完成前は「メモリアル」のための公共施設を標榜しながら、一転して「防災」のための施設へと転化したのである。そのこと

に示されるように、完成に至るまでに被災者や市民、専門家を交えた議論が決定的に不足していた。

多様な姿を有する震災を、体験していない他者に伝えようとするとき、その方法について議論と検討を重ねる必要がある。なぜなら、「人と防災未来センター」がそうであるように、震災を単一のストーリーで語ろうとするとき、そこからは多くの体験が意図的に排除され、逆に記憶の風化を促進する懸



念を抱くからだ。

そのような前提に立つとき、震災の記憶を共有しようとする際には、様々な立場(体験の有無は関係なく)の人の介在が要請されてくる。今回はそのような観点から特集を組んだ。まずは「人と防災未来センター」が抱く問題点を「共有」し、そこからさらなる議論が起こることを切望する。(編集部:菅祥明)

[写真左側が今回オープンした1期施設。右側は建設の進む2期施設。表紙写真は「1.17シアター」]

# 痕跡論

笠原 一人 (京都工芸繊維大学助手/建築史・都市史)

「人と防災未来センター」(以下、「ヒトボウ」)が開館した、この施設が様々な問題を孕んでいることは、計画段階から、筆者を含む複数の人達によって指摘されてきた(註1)。しかしほとんど何も改善されることなく、多くの問題を孕んだまま「ヒトボウ」は開館してしまった。

問題は、この施設がああ震災という出来事を伝えるのにふさわしい「表現」であるかどうか尽きる。建物や展示のデザインだけの問題なのではない。施設を支える思想から施設の機能、建設経過、細部のデザインにいたるまで、施設のあり方すべてを広義の「表現」と捉えたとき、それがああ震災を伝えるにふさわしいかどうかという問題である。言い換えれば、「防災」という「表現」をとることが、ああ震災を検証するための施設として、また震災のための震災後最大規模の公共施設としてふさわしいかどうかである。

「防災」は災害を「予期」するものであり、我々の生活を守るために必要不可欠なものである。しかし、ああ震災を「防災」の視点から語ってしまうや否や、震災は「防災」の“ための”出来事としてしか扱われなくなり、単なる「教訓」となってしまう。「ヒトボウ」は震災の記憶を宿す多数の震災一次資料を所蔵しているが、その展示は、実際に「教訓」としての意味しか持たされていない。しかもほとんどの資料は、箱に整理されて積み上げられただけの状態にある。また「ヒトボウ」では、震災のリアルな「再現」映像が話題を呼んでいるが(註2)、それはやはり「教訓」としての震災の悲惨なイメージだけを与えるものとなっている。多様な問題を孕んだああ震災についての、本当の意味での「再現」ではない。そもそも出来事を「再現」することは原理的に不可能である。だが、こうした「表現」の不可能性の問題が事前に検討された様子もない。

ああ震災とは何であるのかについて、「防災」の

みならず複数の視点から問い直すことが必要である。そのためには、ああ震災をどのように伝えるかという、広義の「表現」の問題がもっと慎重に検討されるべきである。ああ震災を伝えるにふさわしい独自の「表現」のあり方が探求されなければならない。

震災と同様の「負」の出来事についての「表現」として、『ショアー』という映画がよく知られている。この映画では、ホロコーストという出来事が、記録映像を用いた「再現」ではなく体験者の「証言」だけで「表現」されている。ホロコーストでは記録映像が残されておらず、また殺害現場などの「痕跡」の多くが消し去られていることもあって、ああ出来事を「再現」することは不可能かつ無意味であるとされたためである(註3)。つまり、表象不可能性の問題が前提にされている。クロード・ランズマン監督は、ああ出来事を語る「表現」としては、体験の記憶を頼りにした「証言」がふさわしいと判断した。ただし、証言者による「証言」は流暢に行われるわけではない。ランズマン監督は、証言者が「証言」不可能になる瞬間をも執拗に映し出す。しかしそのことがかえって、ああ異常な出来事の現実をリアルに「表現」することになっている。ホロコーストという出来事にふさわしい、「表現」の「新しい形式」(ランズマン)が追求されている。

震災もまた一つの出来事である限りにおいて、ホロコースト同様「再現」の不可能性の問題、すなわち表象不可能性の問題を孕んでいる。だが、ああ震災はホロコーストと同じ出来事ではない。当然、震災についての「表現」の「新しい形式」は、ホロコーストとは違うものになるはずだ。では、ああ震災を伝えるにふさわしい「表現」の「新しい形式」とは、どうあるべきか。

ああ震災は、ホロコーストと異なり、あらゆるものを「痕跡」として残す出来事だったとは言えない

だろうか。地震の力はあらゆるものを破壊し、秩序あるものを断片化する。壊れた建物、隆起した断層、生活の品々など数限りない。しかし、その断片の数々はすべて震災の「痕跡」であると言える。あるいは、地震後の様々な取り組みの記録やそこで使用された物品も震災の「痕跡」である。「公費解体」という行政による「痕跡」の抹殺行為も見られたものの、あの震災では震災一次資料という多数の「痕跡」が残された。

哲学者のジャック・デリダによれば、「痕跡」とは「差延作用」そのものであり、「意味一般の絶対的根源」であるという。さらにそれは、単なる過去のものではなく未来にも関係するものであり、「過去・現在・未来」といった区別と、その直線的な時間の流れでは捉えられないものだという。一方で「予期の特権化」は、出来事の単独性と偶然性を俵い取ってしまうことになるとしている（註4）。

この認識は我々にとって示唆的である。出来事は必ず何らかの「痕跡」を残す。出来事の「事後」において、出来事そのものは決して経験できない。「再現」は不可能である。我々は「痕跡」に向き合い、それに関係するしかない。その「痕跡」は、いつか誰かがそれに出会い、関係することを待っている。「痕跡」は偶然性を孕んでいる。それは、「過去」の記憶をとどめながら、同時に、真の意味での「未来」に開かれていることを意味している。震災一次資料は、そのような「痕跡」として理解することが

できる。

一方「防災」とは、デリダの言う「予期の特権化」そのものである。「防災」は、「過去・現在・未来」を直線的に考えた上で、「未来」を「予期の特権化」によって回収しようとする。「未来」の誰かが「痕跡」に向き合い、関係する方法や思考の様々な様態、可能性をひとつに限定してしまう。「防災」では、「科学」という極めて限定された視点と手法によって、情報はすべて馴致化されている。「ヒトボウ」に震災一次資料が収められていることは、「痕跡」としての震災一次資料の開かれた「未来」が奪われていることを意味している。

あの震災を伝えるために、「痕跡」としての震災一次資料の可能性と不可能性の両方に向き合うことが必要とされている。あの震災という出来事の「表現」は、そこから始めなければならないだろう。「痕跡」としての震災一次資料は、真の「未来」への可能性を宿す「記録」と「記憶」そのものである。その「未来」への可能性を引き出すためには、まず「ヒトボウ」から震災一次資料を切り離さなければならないだろう。それは、あの震災とは何だったのかを問い直すための最低限かつ必要不可欠な作業である。そうしてようやく、我々が「痕跡」に向き合うための条件が整うことになる。

ではその後、「痕跡」に対してどのように向き合うべきなのか。すでに我々はいくつかのヒントに出会っている。（続く）

（註1）筈原一人「論：震災記憶の伝え方疑問」、『神戸新聞』2001年8月27日（月）朝刊、および、『瓦版なまず』第8号（特集：メモリアルセンターと公論）、震災・まちのアーカイブ、2000年8月、参照。また2000年10月と2001年7月の二度にわたって「阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）」の問題を考えるシンポジウムが行なわれ、多くの問題点が指摘された。2000年10月のシンポジウムの様子については、菅祥明『震災の記憶と記録—今、被災地で問われているもの—』、『史料ネット NEWS LETTER』第23号、歴史資料ネットワーク、2001年4月、および、橋本唯子『記

憶』を記録するために—『シンポジウム阪神・淡路大震災をどう伝えるか』から考える—』、『日本史研究』第464号、2001年4月、を参照のこと。2001年7月のシンポジウムの様子については、加藤宏文『「阪神・淡路大震災をどう伝えるか」シンポジウムの記録』、『史料ネット NEWS LETTER』第26号、歴史資料ネットワーク、2001年9月、および、森本米紀「シンポジウム『阪神・淡路大震災をどう伝えるか—メモリアルセンターの問題を考える—』—震災の記憶の発信と継承を巡って—』、『地方史研究』第51巻5号、2001年10月、を参照のこと。

(註2)「震度7の衝撃、生々しすぎ? 体感型展示の神戸『人と防災未来センター』、『朝日新聞』2002年6月13日(木)朝刊、中川理「建築季評:不幸な時代 施設は何を日指すのか」、『読売新聞』(東京版)2002年6月27日(木)夕刊、を参照のこと。いずれも「ヒトボウ」の再現映像や施設のあり方に疑問を投げかけている。

(註3) クロード・ランズマン「ホロコस्त、不可能な表象」、鶴飼哲・高橋哲哉編『ショーアの衝撃』、未来社、1995年

(註4) ジャック・デリダ『根源の彼方に グラマトロジーについて』(上巻)、現代思潮社、1972年、p.135～151

■さまざまな声:

## 癒しの森

藤原 直子 (震災・まちのアーカイブ会員)

大阪から電車で乗り、神戸に向かう。西宮を過ぎて、遠くに六甲の山並みが見えはじめ、神戸に近づくと、どんどん山は近くなる。四季折々、そして、その日の天候に姿を変える山に自分の心象を映し、神戸に入る。

この、震災で犠牲になった6,400人もの人が眠り、被災地と呼ばれる地にオープンした「人と防災未来センター」を訪ね、再びの震災体験に、胸が痛んだ。大阪で震災を経験した私にさえ、あまりと思える映像とジオラマ。被災地という特別な場所で、十分な配慮がなされなかったのは、何故なのだろうか、そのように、こまやかな配慮を欠くままに、現在も建設工事が進んでいる二期施設では、「癒しの空間」を創出するという。「いのちの尊さと、共に生きていることの素晴らしさ」を体験する空間。

いのちの尊さを伝えることも、心の傷を癒すことも、そう簡単にできることではない。本当に癒しを欲している人は、目の届かぬ所でうずくまっている。余力があるからこそ、共に生きていることの素晴らしさを謳えるのだ。誰のための「癒しの空間」なのか、私にはよく判らない。その、「癒しの空間」は震災後、人々が被災地に咲いた草花の

美しき、新芽の誕生にふれる中で癒され、生きる意欲を取り戻したという事例に基づいて創られるのだという。同じ境遇を乗り越え、けなげに咲く花に、そして長い冬を越してほころぶ新しい命に、人は生きる力を与えられたのではないか。そこに自分の心象を映しとって。それを再現してみせようとするのは、一期施設の震災体験の展示と同じく、おごった行為だと、私には思える。

「人と防災未来センター」には、16万点もの震災資料が集められたという。3階の資料展示のコーナーを見て歩くと、様々な資料の中に、震災の犠牲になった人々の遺品などもあり、差し出された資料の重みを感じることができる。資料を残した人のことを思い、差し出した人の思いを受け取り、そのやり取りの中で、癒しとはいわないまでも、傷を回復する空間が生まれてくるのではないだろうか。

展示を見終え、外に出てみるといつもと変わることなく、北に六甲の山は鎮座していた。震災の一部始終をこの山は見ていた。六甲の山に抱かれて、何故また、海辺に「癒しの森」なのかと自分の思いを、また山に重ねてみる。山のない街に住む、私のひがみだろうか。

# バーコードに閉じ込められた言葉

大門 正克 (横浜国立大学教員/歴史学)

2002年5月19日、所用で関西にでかけた機会に神戸に寄った。目的は二つ。一つは、久しぶりに鷹取・長田を歩くこと。もう一つは、「人と防災未来センター」に寄ること。

2年ぶりの鷹取・長田は雨上がりであった。角を曲がり、人家が目に入り、水たまりを見つかるたびに、私は立ち止まり、以前に寺田匡宏さんに案内してもらったときの記憶をたぐりよせようとした。記憶のなかからは残像や声がふいによみがえる。そのたびに、2年前のことと今を重ねて受けとめる。そんな歩き方をしたあとに、「人と防災未来センター」を訪れた。

センターにいた1時間余りのあいだ、私はついぞ落ち着くことができなかった。センターをめぐるのはさまざまな議論があったので、少し身構えていたからなのかもしれない。だが、それだけではなかった。入場後、エレベーターで誘導された4階の「1・17シアター」の衝撃は、いまでも私のからだに残っている。壁一面に映し出された映像に大きな音が加わり、見学者には鋭いライトが容赦なく向けられる。よくわからないうちに映像が始まり、映像と音と光のなかに自分のからださがらされているという感覚、これを暴力といわずに何といったらいいのだろう。

いいようのない重苦しい感覚が残ったまま、私はその後の模型展示や震災ホールでのドキュメンタリーに身を委ね、3階の展示コーナーをたどった。疲れたからだを休めようとして座る場所を探したが、なかなか見つからない。そうこうしているうちに、階の移動は下りのエスカレーターしかなく、元の階にはもどれないことにはじめて気づく。文字通りエスカレーター式の展示方法！ 要するにここには震災について考える時間や空間が保障されていないのだ。鷹取や長田を歩き、2年前の記憶をたどったときとはあまりにも対照的な場所がセンターであった。

ところで、展覧会には、よく趣旨説明や展示物のタイトルなど、展示をサポートする掲示がある。展覧会にでかけたときに、私はそれらの掲示と展示物を交互に眺め、ときに休み、展示コーナーを行きつ戻りつしながら展示を見る。だが、いつものこの見方はセンターでできなかった。それは、センターには展示を説明する言葉が極端に少なかったからであり、休む場所がほとんどなかったからである。いや、センターに言葉が少ないというのは正しくないだろう。掲示されている言葉は少なかったが、センターにも言葉はあった。それは、4階の展示を誘導するコンパニオンの肉声と、3階のバーコードのなかにあったのだ。

3階の展示コーナーの入口では、バーコードを貸し出している。壁に貼りつけられた写真には解説がないので、解説を知りたい見学者は、展示物にバーコードをかざし、バーコードのなかに出てくる解説を読むことになる。バーコードのなかに膨大な解説を収納した新しい展示方法といっていだろう。だが、この解説を丹念に追える人がいったい何人いるだろうか。私もそうであったが、多くの見学者は展示物とバーコードのなかの解説を見ているうちに疲れてしまい、解説を省略してしまうのが実際であった。写真はいうまでもなく大事な表現方法である。だが、小さな写真を無数に貼りつけ、バーコードのなかに言葉を閉じ込めた展示方法は、どう受けとめたらいいのだろうか。

バーコードのなかに言葉をしまうことが、すぐさま問題だとは思わない。センターでは、震災の体験がまだ生々しく、それゆえ解説を掲示しなかったのかもしれない。だが、そもそも展示方法についての説明はセンターのどこにもないので、見学者はその意図を知ることができない。それに加えて3階の展示で私が一番問題だと思ったのは、バーコードのなかの言葉はいつでも書き換え可能なことである。パソコンのホームページがいつのまにか書き換え可能

なように、バーコードのなかの言葉はいつどのよう  
に変わっても確かめる術がない。ここでは震災を説  
明する言葉は責任あるものとして示されていない。  
展示と言葉のあいだの大事な緊張関係はきれいに消  
去されている。要するに、展示の言葉をバーコード  
のなかに閉じ込めることには無理があるのだ。

4階で自分のからだを光や音にさらされたあと、

私は結局、「1・17シアター」や3階の展示方法につ  
いてその意図を知ることができないまま、居場所も  
なく、センターをあとにした。震災について何がし  
か考えることを、センターのような場所に求めるこ  
とは所詮無理なのかもしれない。しかし、このよう  
な場所を私は何と形容したらいいのだろうか？

■さまざまな声：

## 「模索」の対極にあるもの

八ッ塚 一郎（熊本大学教育学部講師／社会心理学）

「人と防災未来センター」を訪れた。私自身は直接の被災体験はなく、震災資料を収集・保存するボ  
ランティア活動に一時期間関わっていた程度だが、それなりに感慨を覚えた。

冒頭のシアターに先進のバーコード展示。これが震災です、よくできた展示でしよう、と言わんば  
かりの、1億を投じた施設に、何よりも驚いた。被災した人の心性を、根本的に逆撫でしているよう  
で、心配になるのだが、そういう議論はあったのだろうか。

シアターの途中で、耐え難いと声をあげる人なんかが出るのではないかと、半ば本気で思ったが、何  
も起きなかった。そういう人は、そもそも最初からここに来るわけもないかと気づいたが、だとしたら  
、何のため、誰のための施設なのかわからない。麗々しい展示や、厳かに安置された資料は、私  
の目にさえ、架空の世界のこのように映る。

震災体験とは何だったのか。震災資料から、どのような新たな価値を生み出すことができるのか。さ  
さやかな自問を続けているが、未だに答えはない。答えは出せなくてもいいから、模索はやめないこ  
と。それが、関わりをもった者の責任なのだ、今は考えている。

【編集部註】八ッ塚氏は本号発行直前、かつて自身も携わられた震災資料の収集・保存の活動について、そ  
の最初期からの経緯について迎るべく来神された。その際に急遽「人と防災未来センター」についてのコメ  
ントをいただくことができ、掲載するに至ったものである。

### 【試案①】資料との接点を増やす

「人と防災未来センター」には約16万点の資料が収蔵されている。それは一次資料の点数で、図書やビデオ  
などの二次資料もおおよそ2万3000点ある。一次資料の内訳は、例えば「ファイル」が4万6000点、「冊子」  
が7000点、「一紙」に至っては7万8000点を超える（数値は同センター配布資料から）。そして、それらの  
資料は同センター2階の資料室で検索と閲覧が出来る（資料の収蔵庫は7階）。ただし問題なのは、この点  
数に対して検索用端末が3台しかないことで、資料室のスペースも10人いると混雑を感じる。

資料室を拡張できないのであれば、たとえば公立私立を問わず県内の図書館、資（史）料館に、センター  
の資料にアクセスできる端末の設置を提案したい。公立図書館に限れば、相互に蔵書情報が確認できる態勢  
が整いつつある。同センターの資料部門は、開かれた状態にあるとは言いがたい。資料の活用を願うなら、ま  
ずは検索機能を「増殖」する必要があるだろう。（菅 祥明）

# 透過する記憶

菅 祥明 (震災・まちのアーカイブ会員)

## 映像と記憶

米国で同時多発テロ事件が起こった後、封切り間近の映画が上映延期となったり、テレビゲームの新作ソフトが発売延期となる事態が起こった。日本においても、テレビで放映予定の映画が他の作品と差し替えになったりした。これは、それらの中に高層ビルが倒壊したり、飛行機や戦闘機が墜落する(させられる)映像が含まれていたからである。本来は娯楽作品であるそれらが、因らずも「想起させる力」を持ってしまったのだ。事件前は何の痛痒もなく見ることが出来たなのに、WTC崩落までの映像をテレビで見ると、その映像に規定された記憶がフィクションにリアリティーを与えたと言えるだろう。

ところで、「人と防災未来センター」(以下、「未来センター」)を訪れると、来館者は最初に4階の「1.17シアター」を体験することになる。正面のスクリーンからは、被災地である神戸や淡路島の街並みが、地震によって壊れていったさまが連続して流される。それと同時に強い光と大音響もシアター内に充満し、立ったままでそれを体験する観覧者はやがてかすかに床が振動することにも気付く、という仕掛けになっている。

それはCGやジオラマなどを用いた再現映像で、倒壊していく高速道路や駅舎、さらには商店街なども場所が特定できないようになっている。だが、そのような出来事が起こったのは紛れもない事実である。フィクションではなく、まさにそれらの場所では人が死んでいったのだ。シアターの映像の中で高速道路が「倒れる」たびに人も「死ぬ」のだ。このような、死者を二度殺す行為を誰が許したのだろうか。

## リアリティーの陥穽

それは、震災という〈出来事〉を「伝えたい」と願う、多くの人の純粋な思いかも知れない。ある被災者の言うように「もっと(地面を)揺さぶらない

と伝わらない」といったさらなる過剰を求める声もある。これはリアリティーがなければ〈出来事〉は伝わらないとする、一種の「体験至上主義」と言えるだろう。

そのことは「1.17シアター」の次に見る、「震災直後のまち」というジオラマ模型にも当てはまる。

この「まち」の中では、家屋が傾き、自動車は押し潰され、煙を思わせるスモークが微かに宙を舞っている。ペランダでは洗濯物が掛かったままになっており、赤黒い光が火災の跡を表現している。そのモデルが、かつて存在した「廃墟」であることは間違いない。しかしながら、そこでのリアリティーの追求はあくまで外面的なものでしかない。

廃墟とは、かつてそこに存在した人間および都市の歴史の喪失体験である。そして阪神・淡路大震災においてより重要なのは、その「廃墟」が消去させられたという事実である。その意味では二重の喪失体験を背負っていると言えるだろう。けれども、それら内面の〈出来事〉は再現されていない。リアリティーを追求したはずのジオラマ模型からは多くの事実がこぼれ落ちている。いやむしろ、「再現」という手法を採ったがゆえ起こった当然の結果かも知れない。なぜなら、「再現」という行為には視覚や聴覚などで認知しうる何らかの「かたち」が必要であり、それらを媒介として観覧者に「事実」を提示しようとする。それゆえ、人間が体感できないものは伝えることができない(たとえば「死」などを)。

「未来センター」の「再現」コーナーに関しては、主に「必要か必要でないか」や「過剰かそうでないか」という点に関心が集まっている。しかし、最大の問題点は、「再現」という手法を採ったことによって、〈出来事〉の表層をなぞることで制作者も観覧者も満足してしまうところにある。

## 「希望」という欺瞞

ジオラマ模型を見終わると、その次に「大震災

ホール」でドキュメンタリー作品を観ることになる。「このまちと生きる(表題)」というその作品においては、震災で姉を失った「私」が主人公となっている。(以下は物語のあらすじ)

ダンスの下敷きとなった姉は、「私」に、「いいから逃げて!」と叫ぶ。かろうじて助け出された姉だが、担ぎ込まれた病院も被害を受けており、そこで息をひきとることになる。

やがてその他の家族(両親・弟・祖母)とともに「私」は小学校へ避難する。だが、そこにはプライバシーが存在せず、悪臭すら漂っている。やがて「私」のモノローグが挿入される。「姉にもやりたいこと、たくさんあったはず…」と。

悲嘆に暮れる「私」であるが、「生き抜いて!」という姉の言葉を聞いたところから状況は変わってくる(BGMも明るいものになる)。震災で工場を失った両親もアルバイトを探し始め、弟は小遣いをねだらなくなる。「私」も家事を手伝うようになる。そこで「私」は、「姉に生かされている」と感じるに至る。その後、「私」は進学が叶い、父は工場を再建、祖母は仮設住宅から災害復興住宅に移ることで「友だちができた」と喜ぶ。

時間は過ぎて「私」は大人になり、「人間の力の強さと大きさ」や「癒すのはこの「まち」の温もり」という感慨を抱き、10分強の物語も終わる。

ここに登場するのは架空の人物である。けれども、どこかで見聞きしたことのあるエピソードと映像が散りばめられている。それまでに悲惨な「体験」をした来館者も、ようやくこのドキュメンタリー作品に至って希望を感じられる仕組みになっている。

だが、このドキュメンタリー作品は、その予定調和的な内容がかえって〈出来事〉との軌轢を生み出している。そこでは、「私」の姉の死も「私」が前向きに生きるために必要であって無意味ではなかった、という設定になっている。それによって「死」という欠落感を埋めて観覧者にも希望を与えようとするのだ。

しかしながら、それは「欺瞞の物語」(註1)で

しかない。そういう分かりやすい「物語」にすることで〈出来事〉を伝えようとするのだが、それはイメージの固着を招き、「語られないもの」や「語りようのないもの」は排除される。

#### 俯瞰する視点

部分が全体を規定するとすれば、「未来センター」の4階はそれにあてはまる。「1.17シアター」に「震災直後のまち」、「大震災ホール」のドキュメンタリー作品。そこでは震災の記憶が映像やジオラマを通じて来館者に“提供”されている。その「受け手」は入館料(大人500円、小・中学生250円)を払えば記憶に近づいたと感じ、一方の「送り手」は観光地化して集客力が高まれば「震災を伝えた」という幻想に浸るだろう。だがそれは、「パッケージ化」された喪失を消費したに過ぎない(註2)。「つくる」という行為がはらみ持つ危険性に無自覚であった結果とも言える。「いったい震災の何を伝えればよいのか」といった疑問は最初からそこには存在しないのだ。

4階の展示部門が示すように、「未来センター」は震災という〈出来事〉を俯瞰しようとし、来館者にもその視点を強制する。差異をはらむ記憶ではなく、「物語」に収斂された全体像を俯瞰する。その時、そこには塊としての「体験」・マスとしての「人」しかおらず、匿名化された記憶は「未来」へと透過していく。

そして、「未来センター」が所蔵する16万点の資料は、〈出来事〉の安易な俯瞰を拒む。教訓の抽出や、リアリティーをもって〈出来事〉を再現させるためだけに存在するのではない。膨大な資料がはたして何のために「ある」のか明快な答えは示せないだろう。けれども、その「分からなさ」すらも、〈出来事〉の複雑さを表している。

震災資料は〈出来事〉の他者にも開かれたものであることが求められている。記憶の「分有」のためにも、また、「分かりやすさ」を選択した「未来センター」の、新たな暴力の生起に抗うためにも。

(註1) 岡真理『記憶/物語』、岩波書店、2000年

(註2) マリタ・スターケン「テロルの記憶 オクラホマシティとニューヨークにみるアメリカのメモリアル化」、『現代思想』第30巻第9号、青土社、2002年7月



## 「震災論」のゆくえ



- 編集部から -

昨年11月15日、季村敏夫氏より会員に宛てて1通の電子メールが送られてきました。「アンケート」と題されたその中に次のような質問が記されていました。

『阪神大震災といえば、即座に思い浮かぶフレーズ、言葉を、  
あげてくださいませんか。』

その後、アンケートの回答が届き、集計が行われました。

季村氏のねらいは、「思いつく言葉或いはイメージと取り上げる理由を、合わせて展開してはじめて差異化できうる、他者との関係が読みとれる」という言葉に端的に表れていると思われます。あるいは、「震災に対するその人の見方、思想性」を示すことになるのかもしれませんが。本号ではその問いに対する会員各氏の回答を掲載します。

藤原 直子 (震災・まちのアーカイブ会員)

「飛んで火に入る冬の虫」

これは震災直後にボランティアに入った方が3月中旬に「あなたにとって震災とは」という旨のアンケートに答えたものです。被災地の外からかかわった者として、この言葉がずっと頭に残っていました。

冬の灯火に飛び込んで身を焼いて死ぬことはなかったけれど、ここで焦がした身は一を持ち続けるのだと。

「命のスージ(祝い)をいたしましょう」

これは、沖縄音楽界の巨人と言われる照屋林助さんの自伝に出てくる言葉です。戦争で20万人以上の犠牲者が出た沖縄で戦後間もなく、林助さんの師匠であるブーテンさんは、林助さんを誘って「命のスージ(祝い)をしに行こう」と知り合いの家々を訪ね歩きます。突然の来訪に、亡くした家族、親戚、知り合いを思っで悲しみに暮れるいた人たちは「命のスージ?このような時にどうしてお祝いをするんですか。みんな悲しんでいるというのに」と怪訝な顔で、2人を迎えます。それに答えてブーテンさんは、「このような時だからこそ命のお祝いをするのです。今度の戦争ではほんとうにたくさんの人々が亡くなりました。だから、命の助かった者たちがお祝いをして元気を出さないと、亡くなった人たちの魂も浮かばれません。4人に1人が死んだかもしれませんが、3人も生き残ったではありませんか。さあ、はなやかに命のお祝いをしましょう」と説きました。そうして、一緒に歌をうたったり、踊ったりしていると、悲しんでいたり不機嫌だった人の顔が次第に晴れていき、その場に居合せた林助さんは「行き残った者には、明るく生きていく義務があるのだ」とひしひしと感じられたと書いています。

震災で多くの犠牲者が出たあと、亡くした命に度々「鎮魂」という言葉が使われはしたけれど、言葉ほどにその命に向き合ってきたのだろうか。亡くした命に、近くに犠牲を出した人々に向かうとき、臆病になりすぎてはいなかっただろうか。自戒を込めて、「命の祝い」などとおせっかいいにも家に押しかけ歌い、踊る行為に宿るものを考えてみたいと思うのです。

アトランダムに四つ。

先ず、「いかにやわらかく壊れるか」。

震災の年の3月24日、読売新聞に発表された佐々木幹郎氏の言葉。目にしただき、そのまま紙面に釘付けになってしまった記憶がある。ただなかに呻いているうちはいまだ何もつかめない、体験を経験に抽象化させるための距離の取り方を学ばねばと覚った。あれから八年経とうとするが、いわば存在論から発せられたこの言葉に尽きているのではないか。いつ如何なるときに大惨事に襲われても、強固で堅牢な都市、情報システムを構築せねばならぬとする時務情勢論が現在主流だが、存在論はそれに不可避的に衝突する、いや防災論は存在論を内包しなければならない。

震災後わが被災地に留まらず、いわば日本全体が溶解雪崩現象的に、危機管理、防災主導で動いているが、そこに決定的に欠けている視点が「やわらかく」という言葉の内部に潜んでいる。しかも「いかに」と方法論的に問い詰める必要性も指摘されている。いうまでもなく批評の契機を孕まない「防」なる発想は不可避的に「国防」に行き着く。その回路を如何なるロジックで切断するか。これこそが阪神大震災で学んだことだが、ほとんどの議論は防災主導の迫力に押され気味で、「人と未来防災センター」批判に端的に見られる通り、いまだ根底的な言説は残念ながら被災地から生み出されていない。そのことを踏まえ、かつ有史以来の自然と人間の係わりという視座に立つと、簡にして要を得たこの言葉は的確に事態の本質を言い当てている。

次は「災害はドラマではない。むしろ現実のパロディである」。

なんでもない叙述のようだが、ここには批評の眼がある。行為する自己を、距離をおいてとらえようとする醒めた眼である。「放つとかれへん」、そんな思いに駆られ、「ポランティア」という行為に赴いた人は多い。筆者もその中の一人だが、身体行為をあえて拒絶し、出来事の本質を凝視した少数者の発想は見逃せない。もはや古典ともいつてよい野口武彦氏の『安政江戸地震』（ちくま新書、1997年3月）にある。出会ったとき、思わずにやりとした。だが当時、ドラマに狂いたがりたいたいの多かったこと。悪党を演じるドラマはほとんどなく、大勢は、悪の自覚の欠けらもない善人を目指したものであった。「モウいい加減にしてくんなし。わちきはいつそ鬱陶しいよウ」（『江戸のヨブ』）、この遊女黛のつぶやきを、自己批評として幾たびつぶやいたことか。

野口氏は他にも、明らかに阪神大震災を下敷きにしたフレーズが多くある。「その情景には不思議な詩情があった。／廃墟に特有の悲哀感でもなかったし、土塀の崩れのノスタルジアとも違っていた」（『近代日本の詩と史実』中公叢書）、この言葉もその一つ。詩情をもたらすのは、阪神間の屋敷町に在った古い築地塀と土蔵の崩壊した姿。わずかに数秒の振動で、一挙に崩壊した生活現実になかのそれら「崩れ」た姿が、溢れ出る詩に見えたという。亀裂により露出した「各自の物性」、「物性と人性とはどこか深い所で連動し、たがいに食い入って」おり、かつ「物性と人性は同一の法則」に従い、「自然と人事、事物と歴史、詩と史実は連続している」とする視線は端倪すべからざるものがある。

続いて「崩れ」。

あの日から、身体のごんごんが「崩れ」続けている。まるでこころのなかに傾斜があるように。しかも止むことはない。幸田文に、大崩落という災害現場をたずねた随筆集『崩れ』（講談社文庫）があり、そこにこうある。「五月の陽は金色、五月の風は薫風だが、崩壊は

憚ることなくその陽その風のもとに、皮のむけ崩れた肌をさらして、凝然と、こちら向きに静まっていた。無惨であり、近づきたい畏怖があり、しかもいうにいわれぬ悲愁感が沈殿していた。言語を絶した悲愁が滞っているが、近づきたい畏怖がある、そんな佇まいを被災地から探すのは至難である。紋切り型の被害告発発想からは絶対に生まれぬものだ。

最後は、北村透谷の「人は常に或度に於て何物かの犠牲たり」。

明治26年「文学界」に発表された「桂川（吊歌）を評して情死に及ぶ」の中の一節。この言葉を、『浪漫的滑走』（桶谷秀昭著、1997年）の中に見出したとき、はっとした。犠牲は「にえ」と読ませている。何者かの、「かの」という響きが重要である。あの日、あの場所で、わたしは軀軀を抱えずくまっていた。具体的な場所は炎上する菅原市場だが、わたしの位置は、死者からも生者からもズレていた。ズレを「ほとり」と命名してみたが、かつて経験したことのない静寂感に包まれていた。「死者に命じられている」。その後の歩みは、静寂感に潜む死者の沈黙に命じられるままに始まった。

昨日12月7日、写真家宮本隆司氏の作品「grass」に出会ったときの衝撃をたどっていると透谷の言葉に行き着いた。（川崎市市民ミュージアムで開催中の宮本隆司写真展「AFTER 1995-2002: KOBÉ & SATYAM」、寺田匡宏氏主宰のフォーラム【記憶・歴史・表現】の第1回研究会で参加）。

異様（ことよう、と読んで頂きたい）であった。作る人のところが、モノそのものに乗り移るという「衝迫」。そこでは、モノに負いかぶさっていた今までの意味がすべて引き剥がされていた。非凡というより、おそるべき所業だ。作品「grass」には所謂強いメッセージはないが、おののきと鎮魂のあわいにゆれる声、声以前の深い祈り、おののきと鎮魂を同時に背負い持つ息づかいがあり、しかもいかなる気負いからも解かれ、素手素足の姿がたち現われていた。家に戻ってもわたしは、いまだ興奮醒めやらぬ状態にあるが、宮本氏が指し示す表現により、ついに神戸に、いや世界の被災地にかすかな光が舞い降りたように思えた。

「grass」は言うまでもなく草。オウム真理教のサティアンが在った上九一色村（ベオグラード、水俣、ニューヨーク、場所はどこでもよい）に生息していたもの。しかも枯れた草（青い草ではなく、「しほれたる」もの、衰弱したものを採用したことに注目）を素材に選んでいる。宮本氏の採用した技法は極めてシンプルなフォトグラムだった。誰もが一度は幼年時代に教室で行った原初的方法である。印画紙の上に枯れた草を横たえ、その上に光を投げかける。光そのものに、在るがままの姿で委ねるといふものだが、作品になると、光は闇に、草の影は光に反転する。土や砂粒の気流のように微細な飛沫、絡みつく根のふるえ、見る者に挑むような切っ先で迫る葉の様態、いきなり時間を切断された死者をおもわせる茎のねじれなど、草が隠し持つポエジイというか、草そのものの現前、「事物の上に降り」たった「衝迫」にわたしは打ちのめされていた。

震災直後の神戸を、非当事者の一人として通過した宮本氏の視線の果てに、このような黙示録的風景が潜んでいたとは。フォトグラムにたどり着くまで、おそらく幾度かの自己崩壊、滅びの自覚があったのだろう。表現意識の崩壊、これまでの技法の破綻、そのような経験をかいくぐった果てにふっと訪れた技法に相違ない。しかしここに至り、そっと指し出された作品行為が、テロ、地域紛争、災害など世界各地で呻き続ける被災地のこのころをもの見事に抽象化させていることに震撼とした。「grass」は被害体験の直接性から抜け出せず、いまだ低迷したままの神戸への激励であり、同時に表現への希望と読みとるべきである。宮本氏の草のふるえに拮抗できるものは、朽ち続ける石に委ねよとした建築家宮本佳明の作品「防潮堤」くらいか。

犠牲といえ、この言葉をタイトルにした映像作品がある。そこにも枯れた植物が出てくる。枯れた松の木を植え、ひたすら水をそそぎ続ける男を描いた「サクリファイス」（タルコフスキ監督最後の作品）だが、透谷にも宮本氏にも繋がるものがあるとおもう。草そのものが内包する聖性の顕現という宮本氏の今回の試みは敬服に値する。

場所を浅草雷門前へかえた宮本氏を囲む集いは、ここに深く刻みこまれるだろう。若

いの熱気により、寡黙な宮本氏の口元が思わずゆるんだのが忘れ難い。目覚めると銀世界、翌朝の新聞でそんな活字を眼にしたとき、あつと声をあげた。石牟礼道子氏をたずね、聞き取りをまとめたブックレットのタイトルに、わたしは「草の光に」という四文字を書き添えていたことを思い出したからである。なんという偶然、出会いはまさに一瞬。瞬間のなかの恩寵。実り多い一年であった。

#### 季村 範江（震災・まちのアーカイブ会員）

「いかにやわらかく壊れるか」

佐々木幹郎氏の言葉。かたちあるものは壊れるという当たり前といえど当たり前のことを改めて実感。自然の力の前で人間が出来ることは果たして何か、この言葉はそれを見事に言っています。

「大震災で、一夜のうちに焼野原の真中に投げ出された時、私は思わず

自分の周囲を見廻さずにはいられなかった。これが俺かと思ったのである。」

これは関東大震災で被災した人の言葉です。この言葉を引用し、劇作家の太田吾吾氏が、被災直後の心情を「生命期」と名づけ、自分の生を再発見した時期であったと書いています。

「まちのアーカイブ」

まちのアーカイブとは文書館、資料館のこと。私達の活動は、震災資料を被災した人びとの中で保存しようというもの。歴史学に門外漢の私が、いかなる巡りあわせか、今この場所にいることの不思議。

#### 木内 寛子（震災・まちのアーカイブ会員）

##### A 《こんなときはがんばるしかない》

地震の直後、長田で、熱い紅茶をみちゆくひとにふるまいながら、このように

神父さんがおっしゃっていたと、林哲夫さんの文章を読みました。

##### B 《自然の非常時にあたって、万物が各自の物性をよみがえらせた》

『近代日本の詩と史実』（野口武彦著、中公叢書、2002年）のあとがきより。

Aについて

《こんなとき》ってどんなとき？ それは、そのとき、その場では、共有されていたでしょう。《こんなときは》の《は》は、《こんなとき》をはっきりとたてます。それはこのときを、受け入れることでもある。

《こんなとき》には、現実をみている目があります。そして、こんなときに、あなたとわたしが共に在ることをしめています。

《こんなとき》といった、具体的には何も言っていない何も指していないことばで通じ合うこと、それは危険をふくむかもしれませんが。《こんなとき》を共有しているという幻想に安らぐにすぎないのかもしれない。

けれども《こんなとき》ということばが含むものは、ひと個人のおもいを超えるかもしれない、越えてひとつをつつむかもしれない。

このことばを知ったのは、1995年の前半だったかと思いますが、神戸市灘区で地震に会い、自宅にはいたした被害がなかったといっても、被災地に暮したわたしはこのことばに支えられた。文章で読んだので、実際にその神父さんの声を聞いてはいませんが、そのことばにぬくもりを覚えしました。それは、相手にと同時に神父さん自身に言い聞かせているように聞こえたこともあるのかもしれません。がんばってくださいではなく《がんばるしかない》。《しかない》ということばに、こんな受け入れがたいときに在って（がんばって）生きていくしかない、いのちの存在がたちあらわれているのを感じます。

Bについて

もうすこし続けます。先の引用に続けて、《満目の廃墟のあちこちで、平時には構造物に閉じこめられ、この異変で開放された物質の「詩」が溢れていた。歴史の変動期にも同じことがおこるのではないか。》

立っている位置としてはAと対照的かもしれませんが。発言の時期の違いがあるかもしれませんが、これは野口武彦の地震直後の感覚のように思えます。歴史云々のところはわかりませんが、

わたしにあった地震直後の妙な開放感はこのようにに因するのかもしれないと思います。

けれどもAには負けるなあ。雨が降ったら、理より観察より、洗濯物を取り入れなくちゃ、そうでしょう？ そう言う意味で。

ただ、直後のBの位置もいいな。AとBの位置が共存できて、あたりまえなのだろうと思います。ひとのなかでは共存していると思います。けれどもひととはときどきそのことを忘れる。この共存は個人の内部だけではなく社会においても言えると思います。

「子供時代は、そのものとしては、もう無い」ジグムント・フロイト/  
「無意識は他者の語らいである」ジャック・ラカン

一見、震災とは無関係な言葉のように思えるが、そうではない。震災を含めたあらゆる出来事の「記憶」の表現論は、この2つの言葉からしか始まらない。2つの言葉は同じことを表裏から論じている。いずれも「自己」の「記憶」に関わる問題を含んでいる。

フロイトの言葉は、自らの「始まり」である子供時代そのものには、もはや触れることができないことを告げる。それは、自らの根拠を自ら語ることはできないことを示唆している。一方、フロイトを継承する精神分析学者ラカンの言葉は、無意識は常に言語という「他者」や「他者」の欲望に占められていることを告げる。それは、「自己」が常に「他者」に媒介されてしか存在し得ないことを意味している。2つの言葉は、純粋な「自己」そのものには永遠に触れられないこと、すなわち「自己」の不可能性の問題を、表裏の2つの側面から示しているのである。

出来事の「記憶」の表現は、この「自己」の不可能性が前提にされなければならない。あの出来事そのものには、もはや直接触れることはできない。また出来事についての「自己」の「記憶」は、もはや言語や技法という「自己」の「外」にあるものによってしか表現することができない。純粋な「記憶」そのものはあり得ず、「記憶」には不可能性が伴う。「自己」の「記憶」は、自ら「占有」(共有)することはできず、「他者」によって「分有」されざるを得ないのである。このことから、出来事そのものの「再現」は論理的に不可能であることが明らかになる。「記憶」の表現は、こうした「自己」や「記憶」の不可能性を前提にしなければならない。

「自己」や「記憶」の不可能性を前提にしなければならない。「人と防災未来センター」で上映されているような、「ヒューマン」な「未来」と「防災」のための「再現」が、何の疑いもなく為されることになる。前述のように「再現」は原理的に不可能である。どれほど高度な科学的手段を用いても、その「再現」は本当の意味での「再現」ではない。それは偏った一つの視点からの表現に過ぎないのだが、そのことが隠蔽され、あたかも真実であるかのように語られてしまう。「再現」は、震災という出来事が我々にとって何であったのか、という根源的な問いを無にしてしまう。

また、震災の記憶は被災の当事者にしか語れない、といった思考も招いてしまう。震災後生じたのは、被災することがいかに悲惨であるかを訴え、また被災の当事者と非当事者とを差別化するという、まさに悲惨な状況であった。それは、関東大震災直後に多くの外国人が虐殺された状況となら変わらない。純粋であると思いつままれた「自己」としての巨大な「被災者共同体」が生み出され、「当事者の呪縛」(森本米紀)に囚われた被災者による、「他者」には届かない「ヒューマン」な「独り言」だけが噴出する。

「記憶」の表現の困難や「他者」についての認識を欠いた思考が蔓延する、まさしく悲惨な状況から、震災についての「他者」に向けた普遍的な思考と多様な語りへの救いは、「自己」や「記憶」の不可能性を前提することによってのみもたらされる。それにはまず、そのことを認識することから始めるしかない。科学的手段を振り回すしか能がない、あるいは「ヒューマン」な解決によって「被災者共同体」を生み出し、そこに自ら埋もれていく人々に向けて、この苛烈な人間の「現実」を示す2つの言葉を贈りたい。

#### 「建築することの悲劇」磯崎新

1960年代以降の世界の建築界を思潮と作品の両面でリードしてきた建築家磯崎新が、阪神大震災後に示した言葉である(『批評空間』第2期19号、太田出版、1998年10月より)。作曲家レイジ・ノーノによる歌劇「プロメテオ」の副題として付けられた「聴くことへの悲劇」になぞらえている。

磯崎の問いは常に根源的である。その問いは建築と建築家の「根拠」に向けられてい

る。震災によって生じた現象は「崩壊」である。その結果、都市や建築は「廃墟」となった。磯崎にとって「廃墟」は、単なる「崩壊」を意味するのではなく、建築の「無根拠性」が露わになる場所である。それは建築が原理的に抱える不可能性を示す場所である。

建築は従来、国家や神、あるいは出来事を賞賛し記念するものとして建てられてきた。また日常の生活に秩序を与え続ける装置として、あるいは秩序の表象として存在してきた。しかし、震災という出来事が突きつけるのは、そのような賞賛や秩序としての建築の不可能性であり、否定である。震災は我々に、「負」の出来事をいかに建築できるのか、という問いを投げ掛ける。

磯崎はその答えを示したことがある。1996年に開催された「ヴェネツィア・ビエンナーレ展」において、「地震計としての建築家」というテーマのもとで、磯崎が日本館の「コミッショナー」として出品する作家の人選を行った。その結果、建築家宮本佳明、写真家宮本隆司、建築家石山修武が選ばれ、阪神大震災の被災地から運ばれた瓦礫や被災地の写真を用いた「廃墟」のインスタレーションが制作された。

ここでは「廃墟」だけが展示され、何も「建築しない」ことによって建築の表現が行われた。この作品は絶賛されグランプリを受賞したが、一方で、何も「建築しない」ことはニヒリズムに過ぎないとする批判もあった。しかし磯崎にとっては、震災が突きつける建築の不可能性そのものを認識するための表現として、必然的なものであったはずだ。

賞賛や秩序としての建築が否定されたとき、どのように建築するのかという困難な問題。磯崎の言葉は、建築の不可能性という困難に向き合うための言葉であると言える。

#### 「廃墟をつくる試み」宮本佳明

建築家宮本佳明が、1996年に開催された「ヴェネツィア・ビエンナーレ展」の日本館において「廃墟」のインスタレーションを制作したことを自ら評した言葉である（笠原芳光・季村敏夫編『生者と死者のほitori』人文書院、1997年より）。

この言葉は注意深く読まなければ、本質的なものを読み落としてしまう。「廃墟」とは、本来、「つくられた」建築が崩壊した状態を指す。つまり「廃墟」は「つくらない」ことによって表現する。ところが、ここでは「廃墟」が「つくられる」。この語義矛盾をどのように捉えればよいのだろうか。

この作品は、阪神大震災の被災地から運ばれた瓦礫をそのまま用いているため、一見すると被災地の「再現」であるかのように見える。しかし宮本によれば、それは震災の「再現」ではなく、震災の「表現」なのだという。「放置しておけば時を経ずして土に環るであろう崩壊物を、無理やり『蘇生』させて一時的に『保存』したものだ」ともいう。それを「再現」と判断するか「表現」と判断するかは難しい。いや、ここではむしろ、その判断を難しくすることこそが、宮本のねらいであったとは言えないか。

「記憶」とは、本来、現実と虚構の入り交じったものである。確かに経験した現実であるにもかかわらず、もはやそこには無いものとして、ある。そのような「記憶」をいかに表現すべきか。宮本は、その「記憶」の表現の困難さこそを表現しようとしたと言える。そこにおいて、表現の困難さなど全く前提にしない「再現」からは程遠い、まさに「表現」となり得ていると言える。

磯崎新の人選によって制作されたこの作品だが、同じ作品をめぐる磯崎と宮本の態度の違いが読み取れるのも興味深い。前述したように、磯崎にとってこの作品は、建築の不可能性を確認するためのものである。しかし宮本にとっては、もはや不可能性を確認するだけのものではない。「廃墟をつくる試み」という宮本の言葉を、「建築することの悲劇」という磯崎の言葉と対比すればよい。宮本の言葉には、震災という出来事への「肯定」のまなざしとともに、事後的にはあれ、出来事に対して積極的に関わっていくこうとする姿勢を読み取ることができる。いかにして事後的に出来事に関わるか、という「方法」の模索が始められている。ここから、「記憶」の表現は、新たな段階に入っていくことになる。

\*

「震災でパッと思いつく言葉を」ということで、季村さんから宿題をいただきましたが、これにはだいぶ苦労しました。単語にすれば、たとえば「崩壊（崩れ）」「喪失」「感傷」「生きる」などいろいろ浮かんできますが、これはぼくの個人的な体験そのものなので、それぞれ「説明」を加えようとしても、それを自力で抽象化することは、まだ困難であると思いました。まだ自分の言葉に託して震災を表現しえない部分が、ずっと多いような気がします。以下の言葉は、そのことを踏まえた結果、選んで出したものだと思っております。

「思い出したくないが、忘れたくない」

ここ2年ほど、自分なりに震災の被災者の声に向かいあうことが多くなりましたが、そうした経験のなかで行き当たった言葉の1つです。

「思い出したくない」という感情が、けて「忘却」だけにつながっていかない複雑な心境。震災の衝撃からの時間経過のなかで、能動的であれ、受動的であれ、事実に向き合わざるを得ない人々には、このある意味での自己矛盾を抱えている人は少なくないのではないのでしょうか。

ぼく個人としては、震災という出来事を「記憶すること」も大切だけれど、個人が震災後を生きるためには、震災でうけた衝撃を「忘れていくこと」も大切で、その「記憶のしかた」と「忘れたか」を模索していくことが重要なんだということを、最近実感するようになりました。

「時間は冷酷で、そしてやさしい。亡くなったものには永遠しがなく、生きているものには、いましかない。」

神戸の写真家、米田定藏さんの写真集『都市の記憶—神戸・あの震災』(エピック、2001年)でみつけた言葉です。

時間の経過ということにある性質の裏表をピタリと言い当てているような気がして、余計な解説はいらないと思いますが。この裏表の性質は、別々に存続するのではなく一体のものであること。また、この関係をどう理解していくかということで、個々人の個性や立場があらわれるのではないかと思います。米田さんは、同じ場所の異なる時間を1枚の写真に納めることによって、それを表現されましたが、米田さんの言葉と写真は、「過去」との向きあい方の問題として、ぼくの体験の深いところで共鳴したのだと思います。

「(親子4人家族の中でたった1人生き残った) 5歳の孫が、「おばば、この世で一番大切なものは何だと思う? この世で一番大切なものは命なんだよ」って言うんです。」

このまえ、ルミナリエに行ったんですが、ルミナリエを見ても、「みんなきれいきれいって言うけど、私たちの心の中はどうなるの? 分かってくれる人はこの中にどれくらいいるの?」って言うんです。小さくてもそういうことを感じているのか、と思いつつ、「元気出せて励ましてくれてるのよ」って言っても、「うん、それは分かっているんだけど…」って言うんですよね。この子はどんな人間になるのか心配です。

他の方もそうなんですけど、こんな小さな子が受けた心の傷はどうなるんだろうって思うんです。これが震災後一番気になっていることです。孫のことが心配なんです。」

これは、神戸大学の「震災犠牲者聞き語り調査会」の聞き語りファイルに収録されたある震災遺族の言葉で、調査に協力された遺族の方のさまざまな言葉の中でも、とくに心に引っかかっているものの一つです。

震災による死者への「鎮魂」と、生者への大きな感動と勇気、希望を与える意味で開

「催された「光の芸術」に、歓声を上げる人々の様子を見ながら、「心の傷」を埋めることができなかったという事実。「私たちの心の中はなるの?」「分かってくれる人はこの中にどれくらいいるの?」というある小さな被災者の真剣な問いに、自分ならどんな言葉を返すだろうと、ときどき思い返しては、現実にある震災の表現のあり方について考えています。

佐々木 和子 (震災・まちのアーカイブ会員)

「大空襲以来の大災害だ。よく見ておくように」

(小山仁示『地域史研究』73号、1995年9月より)

1945年(昭和20)3月、故伊勢戸佐一郎氏(地方史家、元大阪市教育長)は、大空襲を受け、焦土と化した大阪を歩きながら、父君から「関東大震災以来の大災害だ。よく見ておけ」といわれたという。今回の震災で、この言葉を思い出され、「大空襲以来の大災害だ。よく見ておくように」と周囲の若い研究者に助言されたとのこと。

私は激震地で暮らしていたが、何がおこっているのか、正直なところ、よくわからなかった。また、動き出そうにも、何をしようか、心も身体もとまどっていた。この言葉に接し、私のできることは、今まわりでおこっていることを、自分の眼で見ておくこと、しっかり脳裏に刻むことだと思った。

#### 震災資料

震災資料は、今回の震災で生まれ、市民権を得ていった言葉だ。地震から2ヶ月たった頃から、震災に関連してつくられた文書、ピラ、チラシ、走り書きのメモまでも、将来のために残していこうとする動きが、被災地でひろまった。まとめられたものだけでなく、「素材」のままの資料からその収集対象となった。歴史研究者や史料保存関係者だけでなく、ボランティア活動をおこなっていた人たちも、図書館職員も、ここで起こったことを何とか伝えたいと動き出した。

何を残すのか、資料にどういった価値があるのか、役立つのかといった議論は取りあえず後回し。今おこっていることの出来事の痕跡をとにかく残そう、何か伝えたいとの素朴な思いで、多くの人たちが一歩踏み出したのである。この一歩から「震災・まちのアーカイブ」が生まれ、「人と防災未来センター」に多くの資料が集まった。

### 「5周年プロジェクト」の展開について

2003年3月、「震災・まちのアーカイブ」は設立5周年を迎えます。それにあわせて現在、「5周年プロジェクト」が進んでいます。その一環として『記録室からアーカイブへ』(仮)の刊行を予定しており、すでに関係者へのインタビューも始まっています。その中では、前身団体である「震災・活動記録室」の誕生から当アーカイブ設立に至る経緯も記されます。これは一民間団体の前史を辿るということのみならず、震災直後からボランティア自身がその活動記録を収集・保

存に動いたという、被災地における資料保存運動の原初を明らかにするものでもあります。

さらに、目録作成の新たな試みも始まっています。それは、アーカイブ所蔵の「中央区ボランティアセンター資料」について、その出所に関する情報や個々の資料の形態にまで踏み込んで記述を行ない、資料が有するコンテクストを出来る限り明らかにしようとするものです。この取り組みは今後の資料の公開や活用を視野に入れたものでもあります。3月末の刊行予定となっております。(菅祥明)

2005年、私たちは震災10周年の年に新しい  
「阪神大震災、記憶のためのミュージアム構想」を発表する。  
それはもはや使い尽くされ疲弊しきったかに見える  
「記憶」ということばの中に新たな芽を芽吹かせ  
可能性を再びよみがえらせることでもある。

一トヨタ財団助成共同研究「記憶・歴史・表現」フォーラムの発足について

寺田 匡宏

私たちがこだわり続ける「記憶」とはもしかしたら手あかにまみれ、そしてもはやぼろぼろになってしまったことばであるかもしれない、ましてやそれを「後世に伝える」などということは破廉恥きわまりない所行、それこそ何千何百の紋切り型として使い尽くされた言い方であるかも知れないが、しかしやはり震災の「記憶」としてしか表現できない何かがあることを認識し、あえて「記憶」の困難性に向きあい、そしてその中で震災の記憶を表現の問題としてとらえ後世に伝えなくてはならないという覚悟と決意を持ったミュージアム、そのようなミュージアムがいまだ神戸にあらわれないからこそ、私たちはそれを構想するために、この共同研究を始める。

2002年11月、私たちは、「震災・まちのアーカイブ」のメンバーの幾人かにも加わってもらい、トヨタ財団から2年間の研究助成を得て「多元的な記憶をどう伝えるかー近代／ポスト近代の戦争と災害後のモニュメント・語り・記録の文化史的研究とその社会化のためのミュージアム構想ー」という共同研究を開始した。〔記憶・歴史・表現〕フォーラムを略称とするこの研究会は、最終目的を「ミュージアム構想」とし、歴史学、民俗学、社会学、建築史の研究者や詩人、ミュージアムのキュレーターがメンバーになり、東京、沖縄、水俣、ベルリンを視察、そしてその上で、多元的な記憶を伝えるためのミュージアムを、震災10年目にあたる2005年に構想として発表することを予定する。

阪神大震災は、社会の多元性と記憶の多元性を明らかにした出来事である。社会の

多元性とは、当たり前のことではあるが、社会がさまざまな個人や集団や共同体からなることであり、震災は日常に埋没する中で見失われていた私たち自身のものでもあるそのさまざまな属性、所属する集団、国籍、経済的条件、身体的条件などの多元性を気づかせた。また記憶の多元性とは、たとえば「心のケア」や「PTSD」という概念が明らかにしたもののだが、記憶の中にも、語るができる記憶もあれば語るのできない記憶もあるということ私たちが知った。実際のところ、本当につらく思い出したくない体験を言葉にできない、あるいはしたくない人は多いはずだ。これらの事柄はすでに、表からも裏からも、上からも下からも、何度も論じられ語られてきたことはわかっているが、しかしそれでもなお、わたしたちは阪神大震災が投げかけたこの問題を受け止めつづけてはならず、そしてそれはミュージアムとしてかたちにならなければならないという立場に立ち、その方法論を考えることを今回の目標とする。

私たちが重視するのは、「記憶」、「歴史」「表現」という3つの視角とそこから導き出される方法論である。記憶という、本来は今ここの出来事ではない現象を扱いながら、一方でそれを歴史という過去の時間の中に位置づけつつ、そこから生じる具体的あるいは抽象的な問題を単にそのままのナマのかたちで目の前に放り出すのではなく、表現としてとぎすませてゆく、そのような営為の中でこそミュージアムは構想されるべきだし、またそれを行いうる場こそがミュージアムであるという考え方に立

当然その際には、アーカイブがこれまでの実践の中で行ってきた記録史料学的震災一次資料の収集も重要な参考事例となるし、あるいはかつて笠原一人さんが提唱した分散化の提言、またプログラムにおけるプロセス重視といったたとえば「せんだいメディアテーク」などの近年の新しい施設が提起した問題や、フォーラムとしてのミュージアム、接触領域としてのミュージアムなどというミュージアム・スタディーズの最近の議論も意識されてくる。

第1回研究会は東京において、宮本隆司氏の写真表現と空襲の記憶をテーマに開催した。第2回研究会は、「震災・まちのアーカイブ」の協力を得て、研究会を神戸で実施することになる。詳しくは別掲記事を参照していただきたいが、1日目は細見和之さん（大阪府立大学講師・ドイツ思想）に「記憶の分有ーベンヤミン、アドルノの場合」と題して、お話しいただく。「アウシュヴィッツ以降詩を書くことは野蛮である」と述べたアドルノ、また『パサーージュ論』

における断片の収集や「歴史哲学テーゼ」における瓦礫の中を未来に向かって飛び去る天使のイメージの探求によって現代における記憶の問題に取り組んだベンヤミンを、今私たちはどのように読めばよいのかを議論したい。また2日目は阿部安成（滋賀大学助教授・歴史学）「きずなに絆されるー1995年地震・震災・人のつながりー」、笠原一人（京都市芸繊維大学助手・建築史）「ダニエル・リベスキントと宮本佳明の建築表現ーユダヤ博物館、ヒロシマ、阪神大震災ー」（仮）、矢守克也（奈良大学助教授・心理学）「阪神大震災の語りについてーく多声性」の観点から」の3つの報告を通じて阪神大震災の歴史叙述、建築、語りという位相にあらわれた表現の問題を議論したい。

このフォーラムは開かれた議論の中から来るべき新しい時代のあたらしい表現を生み出すことを目標としている。『瓦版なまぜ』読者の皆さん、どうぞご自由にご参加下さい。（国立歴史民俗博物館研究員、歴史学）

〔記憶・歴史・表現〕フォーラム 第2回研究会（神戸）  
2003年2月8日（土）～9日（日）

2月8日（土） 14:30～17:00

細見和之氏（ドイツ思想）を囲んで

「記憶の分有ーベンヤミン、アドルノの場合」

〈会場〉 神戸市勤労会館 3階307号室

（神戸市中央区雲井通5-1-2）JR三宮駅から東南方向に徒歩3分

2月9日（日） 10:00～16:30

阿部安成「きずなに絆されるー1995年地震・震災・人のつながりー」

笠原一人「ダニエル・リベスキントと宮本佳明の建築表現

ーユダヤ博物館、ヒロシマ、阪神大震災ー」（仮）

矢守克也「阪神大震災の語りについてーく多声性」の観点からー」

〈会場〉 「震災・まちのアーカイブ」

（神戸市長田区東尻池町1-11-4 神港金鳳閣内）

神戸高速鉄道「高速長田」駅から南に徒歩約10分。

JR神戸線「兵庫」駅からは真西に徒歩約10分。

（申し込み先）E-mail 寺田匡宏 ms-terada@mve.biglobe.ne.jp

震災・まちのアーカイブ archives\_kobe@nifty.com

TEL 季村範江 078-681-6231

## □ 震災資料の現状と展望 □

菅 祥明 (震災・まちのアーカイブ会員)

震災から8年目を迎えるにあたって、震災資料の現状と展望を概観しておく。

昨年4月に阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」(以下、「未来センター」)がオープンしている。同センターには資料部門も置かれており、18万点を超える震災資料が収蔵されている。ともかくも資料の質的劣化や散逸を防ぐための施設が完成したことは評価されるだろう。だが「瓦版なまず」でも指摘してきたように、資料に対して継続的に責任を負う態勢が整っているとは言い難い。さらにその展示部門が震災をいかに表現するかという問いに対して安易な手法を採用した事実は否定できない(詳細は「瓦版なまず」第13号を参照)。ひろく史料保存ということでは、「歴史資料ネットワーク」(事務局・神戸大学文学部内)が昨年5月に改組を行なっている。今後は歴史学会内部にとどまらず市民にも参加を呼びかけ、ともに歴史資料および歴史への認識を構築・共有していこうとするものである。被災史料の救出・保全から始まった動きが被災地の現状に対応するこの改組を通して今後いかなる展開を見せるのかという点からも注目される。

さて、「震災・まちのアーカイブ」では昨年11月、神戸市立鷹取中学校において、同校が所蔵する震災資料の目録作成と現状調査を行なっている。同校は資料を独

自に保存・公開しているのだが、教職員の異動や生徒の「世代交代」もあってか必ずしも万全と言える状態ではなかった。鷹取中学校のような公立学校だけでなく資料を独自に保存している民間団体や個人はほかにもある。それらの状況を網羅的に把握し、ノウハウの提供や助言を行なうことも「未来センター」には求められる。その一方で、震災を契機に生まれた民間のボランティア団体が被災地の状況や目的意識の変化に活動方針の転換やNPO法人化で対応したり、中には活動休止や解散に向かうところもある。資料の散逸や廃棄の危機はそのようなときにも起こりうる。

中核施設たる「未来センター」の誕生は震災資料に関する「システム」が完成に向けて動き始めたことも意味する。それも効率性を保証するものとしては有効に機能するだろう。また、震災資料の集約化も上で述べた理由から進む可能性がある。それらの意義も一概に否定することは出来ない。しかし、資料を保存する多様な姿も被災地が生み出した特質のひとつである。その多様性、資料への愛着、さらにはそこに介在した人々の「思い」の継承も強く求められている。震災資料もひとつの過渡期を迎えたと言えよう。

震災・まちのアーカイブ 「瓦版なまず」第14号

[http://homepage2.nifty.com/archives\\_kobe/](http://homepage2.nifty.com/archives_kobe/)

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町1-11-4 神港金属㈱内

TEL 078-681-6231 FAX 078-681-6232 E-mail:archives\_kobe@nifty.com

発行人：季村範江 編集人：菅 祥明 2003年1月16日発行

# 瓦版なまず 15



震災・まちのアーカイブ

## 痕跡論 2

笠原 一人

出来事の記憶をいかに伝え表現するか、という問題意識は常に難問を孕んでいる。出来事を直接体験しなかった人々がいかにしてその出来事に関わるのか、という難問である。近年は科学的手法を駆使した「再現」による出来事の「追体験」を通じて記憶を「共有」という方法が見られるようになってきている。しかしそれは、出来事を直接体験しなかった人々も含めた万人がどの出来事に関わるために有効な方法なのだろうか。

「再現」や「追体験」は、出来事を直接体験しなかった人々にその出来事を擬似的に体験させることができる。だがそこには、あくまでも出来事そのものを直接体験していることが重要で、出来事を直接体験しなかった人々は「再」表現や「追」体験という形でその出来事を受け入れるしかない、という認識が反映されている。その結果、出来事の「当事者」が特権化され、出来事の「非当事者」には出来事の記憶を語り得ないかのような印象を与えてしまう。果たしてそれが本当に記憶の「共有」をもたらすのだろうか。もたらさないのだとすれば、我々はどうするべきなのか。

今年の2月に神戸で開催された第2回「記憶・歴史・表現」フォーラムにおける細見和之氏の講演は、出来事の「再現」や「追体験」、さらには記憶の「共有」の有効性について検討する上で興味深いもので

あった。講演は「記憶の分有—ベンヤミン・アドルノの場合—」と題され、哲学者のベンヤミンとアドルノ、さらにアーレントを事例としながら、彼らの間で記憶や思想がいかに「分有」されていたか、を論じるものであった。

ここでは「分有」なる概念が、「共有」に代わる概念として提示されていることが重要である。出来事の記憶は、「共有」や「占有」といった概念が前提にするような同一的な状態での所有は不可能であり、「分有」という概念で捉えるしかない、いわば隔たりを含んだまま複数の人々に所有されるしかないようなものである。安易に記憶の「共有」を呼びかけるのではなく、記憶が「分有」されざるを得ないという記憶の困難さに向き合うことこそが、記憶の表現の始まりであることを確認させられる有意義な講演であった。

ただ、個人的にさらに興味深かったのは、この「分有」を可能にしているのが、ベンヤミンやアドルノ、アーレントの難解な思想の内容なのではなくて、実は彼らの関係のあり方にあると言えることだった。細見氏の講演では、彼らの交流のあり方が様々なエピソードを通じて語られていた。ベンヤミンの死の直前に遺稿「歴史の概念について」がアーレントに託されたこと。ベンヤミンがクレイの「天使」の絵画に触発される形で「歴史の概念について」を書いたこと。往復書簡を通じてアドルノとベンヤミンの間で議論が交

わされたこと。ユダヤ人であった彼らがアメリカへ亡命しようとしたこと。ベンヤミンの移動中の死。その後のベンヤミンの遺稿をめぐるのアドルノとアーレントとのアメリカでの交流。そしてアーレントによって提示された「世界」についてのテーブルの比喻。

これらのエピソードからは、遺稿を託すこと、絵画、往復書簡、身体の移動としての亡命、テーブル、といった広義の「モノ」とその移動が彼らを媒介し、それを通じて彼らの思想や記憶の「分有」が可能になっていることを読み取ることができる。我々が時代を超えて彼らの思想や記憶を「分有」することができるのも、「モノ」に媒介されているからに他ならない。広義の「モノ」とその移動が記憶の「分有」を可能にするという現実。この点は講演の中で決して強調されることはなかったが、記憶の「分有」を考える上では重要な問題であり、その延長上に記憶を伝え表現する作業が行われなければならないだろう。

さて、出来事の「痕跡」は「モノ」に他ならない。「痕跡」は、記憶についての思想や観念ではなく、記憶が形や空間を伴った「モノ」として残されたものである。瓦礫や生活用品に出来事の「痕跡」が直接刻み付けられることもあるだろうし、ノートや書籍や紙片に記録されるという形で出来事が「痕跡」となっている場合もあるだろう。出来事の記憶は、出来事が生じた次の瞬間から時空間を隔てられ、「痕跡」として存在し始める。記憶は人の心ではなく「痕跡」に宿っており、「痕跡」を介してばら撒かれるようにして伝えられていくしかない。だとすれば、我々は常に出来事そのものから隔てられ、真の意味

での「再現」や「追体験」は不可能である。しかしそこにこそ「当事者」や「非当事者」といった括りを超えて、後世の人々を含めた万人が出来事の記憶に関わる可能性が残されている。出来事の記憶は「モノ」としての「痕跡」を介して、万人に「分有」されるものだと言える。

しかしこうして、記憶の伝達や表現が「痕跡」に媒介されているという記憶の原理を、ただ確認すればよいわけではない。「痕跡」を確認して感嘆し保存するだけでは、やはり過去の出来事の特権化しているだけで、その出来事に対して現在の我々が生き生きと関わっているとは言い難い。記憶を伝え表現するには、過去をただ過去として葬り去るのではなく、また過去を現在に対して有効に活用するのではなく、「痕跡」の原理に則しながら、現在の我々にとってアクチュアルな問題として過去に関わっていくことが必要であろう。そのためにはいかにすべきか。それには「痕跡」に潜む「記憶の潜在的可能性を顕在化させる」とでも言うべき方法が有効だろう。それは、出来事の記憶を宿した「痕跡」に「補助線」を引くように新しい表現形式を提案する方法だと言ってもよい。

決して難しいことではない。例えば、昨年12月の第1回[記憶・歴史・表現]フォーラムで山本唯人氏によって紹介された東京大空襲の「被災地図」プロジェクトでは、被災者名簿をもとに、被災者がどのように移動したかを地図にプロットする作業が行われていた。それは名簿に収められたデータを用いながら、名簿では可視化されていない図が描き起こされるという新しい表現である。名簿という形のままでは決して見えてこない潜在的な記憶

を、「補助線」を引くようにして顕在化させたものであると言える。

名前が刻印された石碑もまた、記憶の潜在的な可能性が顕在化されたものだと言える。例えば、数字だけでは経験しようもない出来事の「痕跡」としての戦争による死者の数は、石碑に戦没者名を刻むという表現形式によって初めて顕在化され、万人がその出来事の異常さに触れることが出来るようになる。今年3月に第3回「記憶・歴史・表現」フォーラムの一環で訪れた沖縄県平和祈念公園では、本を立てて開いたような形の石碑に沖縄戦での戦没者20数万人の名前が刻まれ、円弧状に並べられている様子が圧巻であった。またアメリカのワシントンにあるベトナム戦争のメモリアルパークでは、マヤ・リンによって公園の自然な地形と一体化する形で戦没者の石碑が設計されている。石碑に刻まれた戦没者名を見る者の姿が磨かれた黒御影石の石碑に映り込み、過去と現在が重なり合うように見える。ここでも、「痕跡」としての名簿に「補助線」が引かれ、決して名簿の真実性を損なわない形で、しかし新しい表現形式が提案されている。

このように、「痕跡」に潜む記憶を決して歪めない形で、しかし現状では可視化されていない記憶の潜在的な可能性を、

形や空間によって可視化させてやればよい。発明的かつ創造的に、しかも「痕跡」に則して過剰なく必然的な形で、新しい表現形式を「痕跡」に与えていけばよいだろう。こうした表現方法は、従来から行なわれている当たり前のものかもしれない。しかしこれは「再現」などという、過去の出来事を絶対化すると同時にとにかく偏り過剰になりがちな記憶の表現とは、思想も方法も異なっている。そこで生み出された新しい表現やこの表現を生み出す作業そのものを通じて、出来事を直接体験しなかった人々でも、その出来事との関わりを個別の生きた新しい出来事にすることができる。「痕跡」を通じて過去の出来事の記憶を万人に開かれたものとして「分有」しつつ、その出来事に現在の我々がアクチュアルに関わっていくための方法として、こうした表現を改めて意識的に捉え直すことが必要であろう。

阪神・淡路大震災では、あらゆる秩序が破壊された代わりに、多数の「痕跡」が震災一次資料として残された。震災の記憶を、被災者以外の人々にとっても関わり得る万人に開かれた普遍的なものとするために、残された「痕跡」に具体的な形で、幾筋もの「補助線」を引くことが我々の課題だと言える。(続く)

(京都市芸繊維大学助手 建築史・都市史)

### 「震災・まちのアーカイブ」2002年度活動日誌①

2002年4月27日(土) 毎日新聞社会事業団から2002年度助成の決定連絡を受ける。午後、本年度の活動について検討。夜、笠原一人氏による、ニューヨークで開催された展覧会のスライド上映会。ニューヨークの街並み、グラウンド・ゼロの様子についても報告が行われた。

5月2日(木) 海文堂書店からブックレット販売について連絡あり。

## 出会うということ

一声、傷、場、音、痕—

季村 敏夫

拝啓

土曜日の研究会（註1）、お疲れさまでした。

おかげで、「記憶の分有—ベンヤミン、アドルノ、アーレントの場合」に参加した一人ひとりに、強い感銘を刻み込むことが出来ました。また場所をかえた二次会での交流は、細見さんを囲む若い人たちの熱意が沸騰し、ぼくにとても忘れられない夜のひとつになりそうです。

まさに、さまざまな声飛び交う場でした。人が佇む場所。場から声が発せられる。しかも一人ひとりから、縦走的、多声的に展開され、圧巻とってよい雰囲気でした。分有とは、「わかる」「わからない」という二つの場所のあわいを永続的に抱え持つこと。「わかる」こと（共有）への安易な凭れこみ（欺瞞性）に対して自覚的になること、同時に、「他者の痛み」など「わからない」として、そのまま思考を中絶させたり、他者への具体的なにじり寄りを遠ざけることへ、細見さんが徹底して疑問符を投げつけたこと。

また雑音やエクリチュールへの言及。洗練された音楽と雑音との関係。書くことの始原は引っ掻く行為であり、文字は傷痕であるという、思索者であり詩作者でもある細見さんの、ゆるぎのない言葉はじつに印象的でした。感銘もまた何ごとかの痕跡だと改めて唸りました。

美しい音楽の、いわば対極に位置する雑音というモノ。ナチスの高級将校たちにより、絶滅収容所内で開かれた音楽のゆうべ。着飾った婦人たちのあいだで、一瞬音がやんだとき、壁の向うから漏れてくる声。囚人たちの呻きや嗚咽の断片を暴力的に覆い隠し、なお美しく鳴り響く音楽の恐ろしさ。貴婦人たちの香水に囲まれた音に比べ、雑音に過ぎぬ嗚咽や呻き声。ざわめき。モノの気配。むしろ微細な雑音に潜む細部にこそ思考の栄養素が隠れているという指摘に、美には傷以外の起源はないのだするジュネの声が重なっていました。さらに言語物質論や証言の特権化を巡る問題など、あの夜話題になった数々はどれひとつを取り出しても、今後もっともっと深く掘り下げねばならないものばかりであったと存じます。

雨の帰路、立ち話ながら、浅間山荘連合赤軍事件等に一瞬触れることが出来、

ぼくは、ぼくらの世代のそれこそ最悪の姿を細見さんから批判されたようにおもしろい、慄然としました。たとえば連合赤軍の行きつく果てを媒介し、貴兄の世代との忌憚ない論議を常に回避し続けてきたのが、うす汚いぼくらです。しかも今やいつも、したり顔。何だかんだといって、体よく生きのびた癖に。(よき人びとは、ついに世界に帰ってこなかった。) 政治行為に傷(ここでも傷である)ついたということからの一つの帰結、所謂「反政治」理念をふりかざし、今まさに社会の具体的な場へコミットしようとする若い人たちを結果的に疎外しているのが団塊の世代のもっとも駄目なところではないでしょうか。立ち話ながら、貴兄とその問題の端緒にやっと立てた喜びを噛みしめております。

震災後、ぼくら家族の、これまでのいわば生活の拠点、全壊した事務所をガレキの場へと接続させ、そこを市民活動の場に変えたのも、政治行為の傷への検証を中断させ、奇妙な折り合いをつけたままの自分への弾劾がこめられていました。眼前の風景に合わせ、この際自分を粉々にしたかったのです。

「君らは功業を為すつもり、僕は忠義を為す積もり」。長州萩の野山獄から、訣別した高杉晋作、久坂玄端らに送った吉田松陰の言葉です。ここでの「忠義」というところにぼくは、震災で亡くなった六千有余名、そしてかつての政治闘争で亡くなった方へのおもいを重ねます。こうして、いのち一つの残り、ガレキとともに放り出された。あとは最低限、喰えたらいいんだ。だから向こうからの訪れに、おもいっきり委ねたらいい。もうながあっても笑っていよう、笑いをすら笑ってしまおう。間違っても「人生が狂った」とだけはいうまい、何を隠そうこれがぼくの、震災後、米味噌醤油の八年間でした。

あのとき、さまざまなもの壊れましたが、そのなかに、まぎれもなく自分が含まれていたこと。二十数年前、強いられて神戸へ戻り、「日本がもしコミュニストの国になったら、僕はもはや決して詩を書かず、遠い田舎の町工場の労働者になって、言葉すくなく鉄を打とう。働くことの好きな、しゃべることのきらいな人間として、火を入れ、鉄を焼き、だまって死んでいこう。」とした詩人石原吉郎のつぶやきを抱きしめ、蔵書を処分し、亡父の借財を背負い込みましたが、そこに潜むある種の欺瞞性に気づいたのはかなり遅れてからでした。

地震による損害、その後、思わぬしくじりによる借財の上乗せ。そのことによる肉体労働への転身。短期間に借財を返済しなければならず、保証行為なども加わり金融業者は家に押しかけるやで、その時点で初めて「揺れ」が現実化し、いわば存分に験されるという試練を通過することになりました。

想い起こせば、映画「ショーア」のビデオを貸してくれと貴兄に電話したのも、苦境をそのままのかたちで受けとめようとする第一歩のときでした。1995年、敗戦後五十年、ぼくにとり、「ショーア」との出会いはいそれほど大きな事件でした。

地震とはいうまでもなく霹靂の所与ながら、それにしても震災後、身のまわりで、ほんとうに在り難い出会いが続きました。人との出会い。震災資料との出会い。資料に導かれた多元的な記憶との出会い。災難に襲われたとき、まさに出会うとよい、だがこれらの事態を、いったい誰に、なにものへ祈ればよいのか。

具体的には、貴兄からぼく、受け取ったぼくから妻、そしてぼくら二人から若い人たちへと、投壘通信のように伝わる息吹を、ぼくはまざまざと場所として感じる事が出来ます。アーレントを読みこむ場合、この息吹がぼくにとり「新しい誕生」であります。そして震災前には予想だに出来なかった経験です。ささやかな場から、戦争の問題、在日の問題、そして抒情や、短歌、俳諧、自由詩の問題まで、忌憚のない応答のテーブル、アーレントのいう世界への開かれた場としての小さなテーブルの分有を今後とも目指したく存じます。土曜日は、ほんとうにありがとうございました。快速電車、乗り過ぎさなかつたでしょうか。

では奥さん、ひと粒種のひなたちゃんによろしく。不一。

平成十五年二月九日

敏夫生

細見和之様、研北

## 活動日誌②

5月11日(土) ホームページの更新や次号「瓦版なまず」の特集などについて検討。

5月16日(木) 「記録室資料」の再点検を行う。

6月1日(土) 記録目録について、ISAD(G)の採用を検討。

6月6日(木) 佐々木和子、ISAD(G)を概説。

6月10日(月) 佐々木和子、季村範江、元町に移転した市民活動センターを訪問。記録室時代の資料の移管について意見交換。

6月17日(月) 辰巳大輔、ホームページにWeb版活動日誌を設置。「電腦日誌」として公開されることに。

6月29日(土) ホームページについて検討。資料整理について検討。

7月1日(月) ホームページを更新。図書目録の公開、リンクの追加。

7月13日(土) 熊本大学八ッ塚一郎氏が来室。被災地における震災資料の収集・保存活動について、最初期からの経緯について説明を行なう。

7月15日(月) ホームページの「瓦版なまず」12号テキスト(一部)を更新。

## 季村敏夫さんへの手紙

——「記憶の分有」をめぐるふたたび——

細見 和之

いかがお過ごしですか。メールいただいたまま、返事が遅れました。

季村さんのお誘いを受け、神戸でお話させていただいて、早ひと月が過ぎようとしています。内輪での研究会ということであり準備もせず出かけたところ、外部の参加者もまじえての「講演会」のようになっていて、少々戸惑いました。戸惑いながらも、ベンヤミンとアーレントの関係に焦点をおいて、いまぼくが考えていることを話しました。翌日には、たいへんハードなスケジュールが組まれていましたが、いかがでしたか。聞きたい報告が目白押しのうえ、前日に提起した者の責任という気もしていたのですが、体が言うことをききませんでした。あの夜、少々飲みすぎもしました。

その飲み会の中では、菅さんや笠原さんなど、ぼくより若いひとたちと活発な議論ができて楽しい時間でした（寺田さんはすっかり風貌が変わってびっくり）。いや、楽しいだけではなく、とても緊張感のある時間でもありました。そんな楽しく緊張感のある場で、かつて共同通信からの配信記事（註2）のなかでぼくが使っていた「記憶の風化」という表現に対して、やはり若いひと（弟さん（註3）が震災で亡くなられたということでしたね）に厳しく突っ込まれたときは、なるほどと深く頷くところがありました。そういうやり取りすらかなかなか実際には行なわれていない、そういう被災後の現状もあるのではないか、ということも思いました。「記憶の風化」が自明のこととして流通する世界と、「記憶の風化」という言葉が存在しようもない世界のあいだの断絶、ということです。この断絶のあいだでこそ、「分有」が語られなければならない……。

ところで、その「分有」についても、言葉として必ずしも「分有」されていない表現なのだ、とあらためて考え直しました。ぼくの報告のあとで記者のひとにも繰り返し確認を求められたのですが、「記憶の分有」という言葉ひとつ取っても、いわゆる「現代思想」の領域ではそれなりに流通しても、一步「公共」の場に出ると正体の知れない言葉になってしまう。そういう点はあらためて考える必要があると思いました。「記憶の領有」に対して「記憶の分有」を対置する、それぐらいの明晰さがあってしかるべきだったと思い返しました。

広い文脈で言うと、「私有」と「共有」という対立的な概念に「分有」は脱構

築的に関係するのだと思います。抽象的に言うと、私たちは何ごとであれ、完璧に「私有」することも完璧に「共有」することもできず、いつも「分有」しているのであって、この「分有」こそがリアルな経験なのですが、このリアルがいつも「私有」か「共有」へと観念化されるのです（この点は、笠原さんが一貫して強調されていたことでした）。

震災体験とその記憶もまた、公的な「共有」（むしろ領有ないし占有と言うべきでしょうか）と極私的な「私有」のはざまで、「分有」されねばならない……。一応、あの日の質疑のなかではそういう方向に議論が向かったと思います。そして、その議論をアーレントの流れに組み込むと、そういう「分有」という関係のなかにこそ、本来もっとゆたかであり得る「政治的」な領域が開かれるはずだ、ということになるのではないのでしょうか。

アーレント自身は、『人間の条件』のなかで、「愛」と「痛み」という経験については、一方で言語化を拒む極私的な体験と語ったり、また他方でディセネンという作家の「どんな悲しみでも、それを物語に変えるか、それについて物語れば、堪えられる」という言葉を第5章のエピグラムに引いたりしています。アーレントにある種の揺らぎが感じられる部分です。ぼく自身は、いわゆる私的なものと公的なもののはざまにこそ本来の公的な領域、政治的な領域が開かれる、という議論の可能性を追求したいと考えています。

これについては、季村さんも作品を発表されている詩誌「纜」（註4）5号の拙稿を参照していただきたいのですが、ベンヤミンに即してぼくが綴っている「語り得ないもの／語り得るもの」をめぐる議論が関係してきます。あそこではドストエフスキイを例に書いていますが、一方でぼくが念頭においていたのはやはり金時鐘さんのことでした。いわゆる「4・3事件」（註5）に関わる記憶を金さんは50年近く胸に秘められていたのですが、同時に繰り返し作品に書かれていたのです。つまり、金さんの秘められた4・3事件の記憶とすでに私たちは何度も出会うとともに出会いそこねていた。そういう金さんの作品行為にも窺われる、「語り得ないもの／語り得るもの」、さらには「語り得ないもの／語りざるを得ないもの」の関係……。

季村さんがメールで書かれていた季村さんたちの世代の「政治的体験」についても、同様のことが考えられるのではないのでしょうか。

70年前後に盛り上がった学園闘争は、あさま山荘事件とその後発覚したリンチ殺人、さらには爆弾闘争という展開のなかで急速に沈静化してゆきました。そのとき誠実なひとびとほど、自分たちの「政治」の必然的な帰結をそこに読み取ってしまったように思います。突き詰めればあのようなになるほかになく、あんならなかった自分はどこかで妥協したのだ、と。そこからそれぞれの体験は私的な領域に固く閉ざされていったのではなかったのでしょうか。

季村さんには信じがたい話かもしれませんが、1980年に大学に入学したぼくにも、いくらかそのような思いがありました。客観的にはすでに学園闘争の記憶は一掃されていたのですが、なお少数の党派と無党派の活動家が存在していました。ぼくは学部から大学院にいたる7年ほどのあいだ、その党派と無党派のあいだで揺れ動いていました。そのなかで、最終的に「ぼくはやはりものを書こう」というよく分からない決意をしました。その時点でぼくもまた、「政治的なもの」に関して自分なりの断絶ないし断念を考えていたふしがあります。結局のところ、党派、無党派を問わず、ぼくには「政治的思考」というものがしっくりきませんでした。理路整然とした相手の主張に反論も同調もしきれないいかにも「幼稚な」自分をもてあましていました。くつつかなければいいのにくつついて、くつつくなら徹し切れればいいのに徹し切れない、じつに中途半端な存在……。

けれども、あるとき、そういう中途半端さに居直ろうという、これまた新たな決意のようなものがやって来ました。「市民運動」という呼び方や括られ方には、正直なところいまでも抵抗がありますが、「政治運動」と「市民運動」という二分法自体も疑ってしかるべきではないでしょうか。「政治」を何かおどろおどろしいもの、秘められたものの領域に囲い込む振る舞いそれ自体が、政治を現にそのようなものとして現象させているのではないのでしょうか。そしてそういう振る舞いが、まさしく男根中心主義的に、政治を屹立させているのではないのでしょうか（政治が「女・子供」を排した「祭りごと」の世界であったとしたら、その神事で結局のところ崇拜されていたのは「男根」です）。

季村さんたちの世代の「政治的体験」に戻ると、閉ざされたはずの私的な記憶はしかし、おそらく季村さんの作品行為においてそうであるように、やはり何らかの形で現に語られているのではないのでしょうか。いわゆる、団塊世代を代表する小説家の作品や映画のような目に見えやすい形とは異なったべつ形の形においてもまた。

翻って、震災体験においても同様のことがあるのではないかと思います。本人の意識のなかで固く閉ざされるとともに現に語られてもいる記憶……。ぼくの友人が一時期よく使い、それこそ現代思想の領域で一定了解されてもいる概念「サバルタン」（言葉を奪われた従属的階級）（註6）を用いるなら、語ることのできる人間と語り得ない人間に、たんに階級的、ジェンダー的、民族的に分割されているのではなく、私たちひとりひとりのなかに複数のサバルタンが存在しているのではないのでしょうか。

その意味では、「記憶の分有」とは語り手の問題であるとともに、聴き手——読み手をふくめて——の問題でもあって、さらには、私たち自身のなかの語り手と聴き手の問題でもあると思います。実際、身体の疼きやうめきを語ろうと

する主体、聴こうとする主体を私たちはどのように呼ばいいのでしょうか？

それは細見和之や季村敏夫でしょうか、細見や季村によって抑圧されているもうひとりのホソミヤキムラでしょうか？

その意味では、自分自身の内部に複数のサバルタンを抱えた、あるいは現にそのような複数のサバルタンからなる私たちにおいて、語る能力と聴く能力、そのふたつを政治的な領域のもっとも重要な要素としてどのようにたがいに養い育ててゆけるかということが、「記憶の分有」をめぐる重要な課題のひとつとなる気がします。あくまで抽象的で、さらには凡庸でさえありますが、そういう方向にぼくの議論は向かうようです。それはまた、世代間の記憶の分有という問題にも通じているはずです。

長々としたうえに散漫な手紙になりました。これで季村さんへの応答となっているでしょうか。4月には故郷の篠山に家族と一緒に引っ越します。そこから、中央と地方、都市と農村の二分法にもやはり脱構築的に対することになるでしょう。そして、ぼく自身がまたべつのホソミと出会うことにもなるでしょう。複数のサバルタンをうちに抱えた私たちは、少数でもすでに驚くほど多数です。

またお会いできる日を楽しみにしています。奥様やアーカイヴのみなさまにもよろしくお伝えください。

2003年3月9日 かずゆき拝

註1、寺田匡宏主宰の共同研究「記憶・歴史・表現」（トヨタ財団2002-2004助成）の第2回研究会のこと。

註2、2001年（平成13年）1月15日、神戸新聞朝刊掲載。新聞タイトルは、「風化」せぬ記憶の「岩盤」—阪神大震災5年。

註3、蘇理剛志のこと。「瓦版なまず」10、11、14号にエッセイを発表している。

註4、雑誌「纜」は、2001年11月1日、もず工房（大阪市中央区安堂寺2丁目4-16-403）の野口豊子責任編集で創刊。最新の第5号（2003年3月1日刊）から、金時鐘による新訳『朝鮮詩集』の連載が始まり注目されている。これまでは、朝鮮の口伝民謡、童謡の採取それらの日本語訳で、島崎藤村、北原白秋、佐藤春夫らの賞賛を得た金素雲の『乳色の雲』（昭和15年刊。タイトル名は違うが、岩波文庫版『朝鮮詩集』の原型）。今回の金時鐘の翻訳表現は、恨（ハン）による「もののはれ」への対峙といった単純なものではない。従来の視点そのものの解体を目指した、あくまでもダイアログであり、恨（ハン）と「もののはれ」の検証の始まりである。

註5、『なぜ書きつけてきたか なぜ沈黙してきたか—濟州島四・三事件の記憶と文学』金石範・金時鐘共著（平凡社）。

註6、崎山政毅の論考、出来事の「歴史記述」、抵抗としての「歴史記述」—「サバルタン研究」をめぐるひとつの試/私論。『20世紀をいかに越えるか』（平凡社）に収録されている。『サバルタンと歴史』（青土社）。

（註作成：季村敏夫）

### 活動日誌③

- 7月18日(木) 次号の「瓦版なまず」の特集について検討。
- 7月21日(日) ホームページに、「なまず情報版」を設置。
- 7月27日(土) 「瓦版なまず」13号発行。
- 7月30日(火) ホームページに「瓦版なまず」13号の目次を掲載。
- 8月3日(土) 午前中、図書整理。午後、ISAD(G)についての勉強会。神戸新聞西栄一記者来室。午後6時から、「沖縄／メモリアルを考える夕べ」を開く。蘇理剛志が沖縄巡検についてスライドを用いて報告。
- 8月26日(木) ホームページ掲載の「瓦版なまず」13号、掲載文を更新。
- 8月31日(土) 「中央区ボランティア」一次資料の詳細目録作成を開始。藤原秀次氏来室。
- 9月14日(土) 日中は、事務所で活動。午後6時から、菅祥明による「水俣・島原報告会」を岡本のお好み焼き屋「サボテン」で開く。
- 9月19日(木) 「中央区ボランティアセンター」一次資料詳細目録が、ほぼ完成。午後、菅祥明撮影の水俣・雲仙のビデオを上映。
- 9月28日(土) 記述目録作成に関して再検討。設立5周年に合わせて行う諸事業について話し合う。
- 10月8日(木) ホームページの活性化について意見交換。
- 10月17日(木) 朝日新聞神戸支社斎藤徳彦記者来室。神戸新聞新聞記者から電話で取材依頼。
- 10月19日(土) 「市民活動センター神戸」実吉威氏へインタビュー(第1回)
- 10月26日(土) 午前中、資料整理。午後2時から、読書会。テキストは、岡真理著『記憶/物語』(岩波書店、2000年)。
- 10月31日(木) 「市民活動センター神戸」より移管された資料の整理。藤原直子、資料寄贈。徐々に資料が増えてきて、模様替えや書棚の追加を検討する。
- 11月7日(木) 午後、鷹取中学校へ同校所蔵資料の現状伺いに出向く。帰途、震災一次資料の保存先でもある喫茶店「アール」に寄る。
- 11月16日(土) 午前、菅祥明が「史料ネット」へ活動状況についてのインタビューを実施。
- 11月23日(土) 午後、寺田匡宏氏が来室。
- 11月30日(土) 午前、資料整理。午後、「市民活動センター神戸」にて実吉威氏、山崎ゆり氏にインタビュー(第2回)
- 12月5日(木) 毎日新聞新井記者から電話で取材依頼あり。
- 2003年
- 1月11日(土) 次号「瓦版なまず」の編集会議。発行準備。3月の設立5周年記念の刊行物ならびに沖縄合宿についての意見交換。
- 1月16日(木) 「瓦版なまず」14号発行。神戸新聞西栄一記者来室。
- 1月30日(木) 季村範江、菅祥明、藤原直子、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会主催の資料保存研修会に参加。(「人と防災未来センター」にて開催)。
- 2月13日(木) 朝日新聞大阪本社音谷健郎氏来室。神戸新聞西栄一記者来室。
- 2月22日(土) 午後、和田稔邦氏来室。3月刊行予定の冊子に関連してインタビューを行う。

■2002 年度(2002/4/01～2003/3/31)に賛助会費・カンパをくださった方々(敬称略)

瀧克則 山本正和 芝村篤樹 達脇明子 筒井耕二 今枝一夫 高野紀子 大門正克  
 矢澤直子 落合祥堯 大谷渡 倉元綾子 佐賀朝 大国正美 岸桂子 保坂裕興 岸田豊美  
 とみさわかよの 小川千代子 相川康子 杉原達 平川千宏 和田悠 他2名

ご支援ありがとうございます

■2002 年度収支報告 (単位:円)

一般会計

<収入の部>

前年度からの繰越金	192,093
ブックレット売上	15,540
賛助会費・カンパ	95,500
事業受託による収入	100,000
雑収入	2,380
銀行利息	3
合計	405,516

<支出の部>

助成金会計へ	273
事務・消耗品	36,307
コピー機借料	33,495
瓦版なまず等送料	60,100
資料費	14,468
フロッピー・ビデオテープ等	8,761
研修補助費	11,500
ブックレット表紙作成費	50,420
雑支出	4,350
合計	219,674

差し引き残額 405,516－219,674=185,842

助成金会計

<収入の部>

毎日新聞大阪社会事業団より	300,000
一般会計より	273
合計	300,273

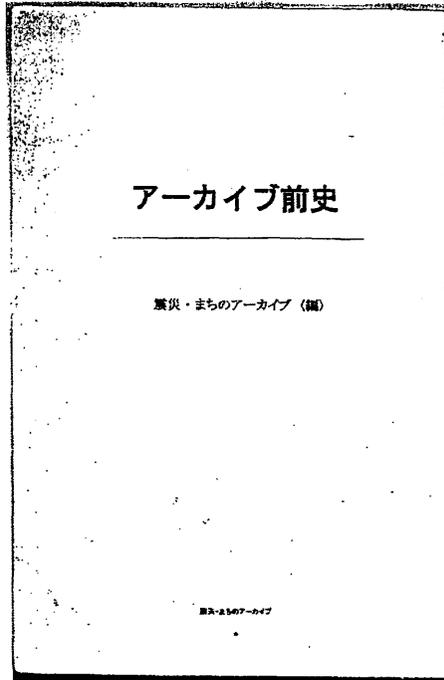
<支出の部>

機材費	233,959
パソコンソフト	22,669
研修補助	28,245
補助者謝金	15,400
合計	300,273

差し引き残額 300,273－300,273=0

※2002 年度の残額 185,842 円は 2003 年度会計に繰り越します

震災・まちのアーカイブ  
 会計 木内 寛子



そして、資料が残された—  
〈そのとき人は何を考え、いかに動いたのか〉

インタビューが紐解く震災資料の原初  
「記述目録」とデジタルアーカイビングの試みなど  
—「前史」という場所から考える

『アーカイブ前史』

近日出来

## 共に生きること

○「人と防災未来センター」の二期施設「ひと未来館」が四月二十六日、神戸市中央区にオープンした。およそ六〇億円が投じられたこの公共施設は「いのちの尊さと共に生きることの素晴らしさを体感・発見」させることを目的としている○筆者もさっそく「ひと未来館」へ赴いた。自然界の摂理を擬人的に表現した映画や樹皮の香りが漂う展示コーナーなど、最新技術が多用されていることに来館者は驚くであろう○しかしながら、施設の提示する、「共に生きることの素晴らしさ」という価値観に違和感を覚える。筆者の体験やこれまでに行なった聞き取りなどを振り返ると、かつての避難所や仮設住宅での生活は、どれだけ他人と共に生きることの困難が伴い、人々がそれと奮闘したかを示している○仮設住宅や災害復興住宅での「孤独死」と自死。共に生きることの叶わなかった人、みずから生きることが拒んだ人たちは、もはや忘れ去られるしかないのだろうか○おそらく、脚色のない「生」を営み続ける沈黙も、能弁で美麗な「ひと未来館」へのささやかな、それでいて粘り強い抵抗として有効だと思われる。

菅 祥明

九九五年二月から四月の間に書かれているが、地震の直後の、いつてみればまだ状況が混乱している時期に書かれたこの四編を通じて佐々木の視点が、揺るぎなく、そして柔軟で、「やわらかく壊れる」に収斂してゆくことになるスタンスを維持していることにはおどろくしかない。

やわらかく壊れる、とは、どういうことか。佐々木は言う。「どんな風に頑丈な建物や都市を造るかということよりも、どんな風に壊れるべきかを、設計思想の中心とするべきではないか」。それは壊れないことではない。壊れてもよい。やわらかくとは壊れることを認める、ということだ。

ここで考えるべきなのは、壊れるということとは何かということだろう。

あらゆる存在がエントロピー増大に向かって進行している以上、山が崩れ、ものが崩れ、かたちあるものがかたちをなくすのは当たり前だ。だが、しかし、そのことを人間は見まいとしてさまざまな努力をしてきた。もつとも行き着いたかたちとして都市に生きる現代人は壊れないことを前提にしてあらゆるものごとを組み立てていると言ってもよいだろう。しかし、じつはそれは人間があるままの世界を見まいとして必死に目をそらし

肩をこわばらせている姿でもある。

「それは人間の滅び方を考えることと似ている」。

壊れることを認め、壊れてしまったものごとを考えたとき、はじめて、人間は世界について考えることが出来る。

そのとき、逆説的だが、そこにはゆたかで、生き生きた場所が広がっている。

壊れるとは、人間の世界との距離のとり方の問題である。そんなことを詩人は見いだしていたのではなからうか。

佐々木幹郎のこの「地球の歩き方」シリーズはまだまだ終わりそうにない。次はどこだろうか。『アジア海道紀行』ではしばらくは東アジアの海をめぐる予告しておきながら今回、それを快く裏切り、ペルシヤ湾（アラビア湾）に向かった羽根の生えた詩人の足は、次あたりケルトの地アイルランドへ、そして海を越えてネイティブアメリカンたちの歌が聞こえる新大陸へ、人間の古層をたずねる旅に向かいそうな気がしているのだが、どうだろうか。

『やわらかく、壊れる』

佐々木幹郎著 みすず書房

#### 活動日誌④

- 2月27日（木）和田稔邦氏来室。中央区ボランティアセンターとその所蔵資料について話を伺う。
- 3月4日（火）中央区ボランティアセンターへ資料の概要調査。垂井加寿恵氏より現在に至るまでの状況を伺う。同センター所蔵資料の仮目録を作成。
- 3月6日（木）「記録室資料」の整理。中央区ボランティアセンターより借り受けた「なんでもかわらばん」の複写など。
- 3月15日（土）アーカイブ設立5周年記念刊行物についての意見交換。
- 3月20日（木）記念刊行物掲載分の原稿について意見交換。資料整理、データ入力。事務所の片付けなどを行なう
- 3月29日（土）助成金再申請用の2002年度活動報告書を作成。記念刊行物の原稿について意見交換。

そ文学があるのだろう。

「豊多摩刑務所が解体されたときわたしの目の前にあったのは、そこに閉じ込められていた思想犯たちの思想でもなく、観念でもなかった。しかし、ありありと言葉だけが浮かび上がった。」

求められているのは思想でもなく、あるいは観念でもない。必要なことはと直接に交信する行為であり、ことばそのものである。

壊される豊多摩監獄に深夜、足を運び、大杉菜が座ったという白い便座にじつと手をふれる佐々木の行動の根底にあるのはこの感覚である。あらゆる場所に立ち、資料を読み込み、追体験を試みつつ、しかしことばという一点に収斂してゆく佐々木の立場はやはり、詩人の方法と言うべきだろう。

方法には道具も必要だ。

佐々木はその準備も怠らない。たとえばチベットを歩くときの装備。カメラ、ビデオ、テープレコーダーは必須だというのが、かなりの重さである。考え方によっては必要以上の重装備である。だが、「記録手段を持たずに歩くことも、大切だろう。しかし、私はそれによってどう変わったのかを知りたいのだ」。

そういえばあの「歩く学者」鶴見良行も、スライド用、白黒ネガ用、カラーネガ用の35mmカメラを三台持ち歩き、どれだけ疲れていてもあるいはどれだけ酒を飲んだ後でも、一日の終わりにには必ず細かなフィールドノートをつけていたという。

「生まれた土地が快いという者は未熟者である。どの土地も自分の故郷であるという者はすでに強い。しかし世界全体が異郷であるというものこそは熟達者である。」

言い古されたことわざだが、しかし、この感覚を持つことはむずかしい。

佐々木幹郎は隅田川の東に住みつづけている。とりわけこだわりの深いのが、深川だが、深川というと松尾芭蕉が三七歳の時、東都での名声を捨てて移り住んだ場所だ。芭蕉はそこを拠点としながら、奥の細道、野ざらし紀行、などいくつもの旅に旅立った。「日々旅にして旅をすみか」とは「奥の細道」に書かれた言葉だが、それはまさに、この感覚のことだろう。移動しているという物理的な条件にプラスして、この世を旅する人間として自分を見つめる視線。東京に住みながらも東京人ではない、チベットに通いながらもチベット・オタクではない。佐々木の旅とはそのような方法のことである。

その旅といえは「地球の歩き方」。これを冠したシリーズがあるが、このことはほど、ねじ曲げられ、薄っぺらくなってしまったことばもないだろう。本来、「地球を歩く」ということばには、人間が縛りつけられているこの大地を太陽系の惑星のひとつとして見るいわばコペルニクスの転回をもたらす視点の広がり、と、わくわくするような開放感があったはずだし、「歩き方」という言い方には、人間のもっとも根元的な歩行という動作とその方法論を突き詰めてみようという含みがあったはずだ。そう考えてみると、この本来は人間の認識を一変させるものであるはずのことばを救い出すことができるのは詩人しかないのではないか、とも思えてくる。

最後に、「なます」でこの本を紹介するから、やはり「やわらかく、壊れる」という表題についてもふれておかななくてはならないだろう。

この「やわらかく、壊れる」は、阪神大震災を論じた文章から採られている。本書の中で震災を論じた文章は、「いま中原中也の魅力」、「再出発する場所」、「いかに、やわらかく壊れるか」、「木と土と水と」の四編。どれもが、神戸の被災地を歩いた見聞をもとに

どは東京、神戸、そしてその他のいくつかの都市が語られている。

多面的な本である。だからいくつも論点がある。

まずひとつは東京とのスタンスの取り方だ。東京というのはそれに対する距離の取り方が実に難しい都市である。あまりに巨大であり、都市自体に歴史があり、さらに都市の論じ方にも歴史がある。どの場所をどのように切り取りどのように論じるのかで、その論者が歩いてきた町や読んできた本の経験、つまり力量があらわにされてしまう。しかし、佐々木は東京を「野良猫ストリート」と言ってしまうことで、それをあつさりとクリアする。「わたしは猫を抱いて東京に来了。」この一言で、場がふわっと和み、これからはじまる詩人との道行きに安心して身をゆだねようという感覚が生まれる。

猫とともに、ということとは東京を猫の視点で見るということである。猫の視点とは、夜の視点であり、車輪の下からの視点であり、路地の視点であり、そして何より気まぐれで本能以外の何ものにも拘束されないという自由な視点である。その立場から佐々木は祭り論、路地論、橋論、音論へと進んでいく。聞こえてくるのは、祭囃子、水がたゆたう音

どこかから聞こえてくる歌声、カモメの鳴き声であり、東京の地誌と記録を織り交ぜながら、水辺からぐるぐる旋回した耳の記憶は、いつの間にか東京から離れ出て、詩人の故郷大阪へ、そして、ついには読経の漂う霧のカタマンスへ、そしてリスボンのフアドの声にまで重なってゆく。「悲しみはリスボンでは、生きる喜びのことだった」。喜びと悲しみの都市論。猫のことを読んでいたつもりが、いつの間にか人生にたどり着いている、その感覚に陶然とする。

一方、しかし、佐々木の魔術はそれだけではない。

本書の圧巻はなんといつても豊多摩監獄の取り壊しを語った部分だろう。

東京都中野区新井にあった中野刑務所通称豊多摩監獄は一九八三年、取り壊された。大正四年に竣工した監獄だから、約七〇年、かつて東洋一といわれたその監獄の「誕生」ならぬ「終焉」を佐々木は克明に記録する。監獄とは、ミシェル・フーコーを引用するまでもなく、近代/ポスト近代を貫く権力装置の表象である。それをむき出しの暴力ととるか、あるいは個々人の内面に浸透するシステム化された権力ととるか、いずれの立場を

選ぶとしても、どうしてもそこでは「政治」のリアリズムにふれざるをえず、したがって言葉も硬直することを避けられないが、しかしここでの佐々木の論じ方は全く違う。

たとえば、佐々木が目指するのは、監獄の窓から何が見えただか、である。監獄の窓からはポプラの木立が見え、そして金色の月が見えた。それを妻にあるいは母親に報告する大杉栄と中野重治のことばは、期せずして監獄の設計者後藤慶二の「まるで童話のような」監獄のスケッチと照応している。なにも無理にメルヘンチックに論じているのではない。小林多喜二が拷問で、戸坂潤が栄養失調で、三木清が不衛生のために死亡した事実を冷徹に見極めながら、しかしむしる権力や政治のことばからすり抜けてゆくものの可能性を追求し、監獄の存在自体が監獄の意味を裏切っていたという事実を発見する。これは詩人のレジスタンスというものである。

「沢庵のしつぽ」が食事につかなくなったことを何度も抗議する中野重治を佐々木は引用する。沢庵のしつぽなど、監獄が表象する国家という権力機構からすると、屁の突っ張りにもならないし、そもそも「ここに文学の何があるのでもない」。しかし、逆説的だが、そのようにして監獄を論じること、そこにこ

## 詩人の地球の歩き方

—佐々木幹郎著『やわらかく、壊れる』について

寺田 匡宏  
(歴史学)

詩人佐々木幹郎が中原中也について語るのを聞いたことがある。

「聞いたことがある。」などと書くともまるで他人事のようになってしまうが、実はそれはほかならぬこの「なまず」にも掲載されているアーカイブでの講演会のことである。

三年ほど前の二〇〇〇年二月、新しい「中原中也全集」の刊行がはじまった頃、全集の編纂を通じて中也資料の収集と整理を行ってきた幹郎さんにそのノウハウを聞くという小さな集まりをアーカイブが企画したときのことだ。

そのときの佐々木幹郎の出で立ちには、中也の「お釜帽」こそなかったものの、黒いマントに首からめがねを十字架のように下げた姿。話の本身は、もちろん中也の詩と資料についてで、たとえば、中也が原稿用紙をどのように推敲したのか、ノートをどう使ったのかを、新しく発見された診療日記から分析する、あるいは愛する子供が亡くなった中也の

精神状態はどのような過程をたどったのかを、「文也の一生」、「夏の夜の博覧会は悲しからずや」そして「冬の長門峡」への詩のこぼの使用方法から復元する。ノートのレプリカを示し、新しく発見された地図を示し、詩を朗読し、ゴシップを繰り出し、裏話を語り、午後一時からはじまったその話は、なんと気づいたときには午後八時ごろになっていた。

それはまったくライブのような感覚だった。新しい資料をどう発掘するか、その資料をどう読むか、資料の読解によって作品の読みがどのように変わっていくか。新しい資料が次々と発見されて中也像がどんどんと変化していくダイナミズムとともに、不謹慎なように聞こえるが、「あの中原中也も実は生きている人間だった」という感覚に魅了された。文学テクストと作者は切り離されているという立場もあるだろう。しかし、佐々木幹郎の語りはそのような「紙の上」の論理を

吹っ飛ばし、生身の中也に肉薄しようとする迫りに満ちていた。

もちろん、幹郎さんの究極の目的は中也の人間像を追求することではない。佐々木幹郎の中也論が詩の言語論、すなわち詩学から発言されていることは当然である。だがしかし、その詩を突き詰めていったとき、彼の前にあらわれるのは、肉体を持った一六歳の中也であり、二〇歳の中也なのであり、いまここで中也のことを語っている佐々木幹郎は、その一六歳であり三〇歳の中也と対等に真正面から対話しているのだ。

あたかも目の前に中原中也が、あるいは長谷川泰子が、小林秀雄が、大岡昇平がつぎつぎと出現するかのような不思議な感覚、それがあのマント姿とともに鮮明に残っている。

さて、このようなエピソードをわざわざ書いたのは、今回『やわらかく、壊れる』を読んだ、実はそれが詩人の方法論であるということに気づいたからである。

昨年六月に出版され大きな話題になった『アジア海道紀行』では文字通り、東アジアの歴史と文学と地理が縦横無尽に語られていたが、その第二弾としてこの三月に刊行された本書では、「都市論」が主題になり、こん

－会員募集のお知らせ－

「震災・まちのアーカイブ」は本年3月で設立5周年を迎えました。地震により全壊した金属加工会社の跡地に事務所を置き、震災一次資料の収集・整理・保存とその公開を行なっています。所蔵資料の多くは、ボランティアが被災地に残したかつての活動記録です。日々の活動の中では震災とそこから立ち現れた「記憶」と「記録」をめぐる様々な問題についての議論も続けています。震災一次資料に関心をお持ちの方は、ぜひご参加ください。

賛助会員を随時募集しています。賛助会員の方には、「瓦版なまず」、『なまずブックレット』等の各種刊行物をお送りし、研究会の案内もお届けします。所蔵資料の閲覧も行なっただけです。年会費は1口1000円。振り込みは、郵便振替00920-2-125759、「震災・まちのアーカイブ」までお願いします。

掲 示 板

ホームページが10000ヒットを達成

「でんきなまずプロジェクト」のもと誕生したアーカイブのホームページは、2003年5月30日(金)、アクセス数10000ヒットを達成しました。ホームページではアーカイブの所蔵資料の一覧を確認することができます。また、そのうちの「音声資料」「ミニコミ」、所蔵図書については目録の公開も行なっています。Web版の活動日誌も更新中です。(電腦部より)

アーカイブ、支援対象団体に選定される

毎日新聞社と毎日新聞社会事業団が阪神・淡路大震災の被災地などで活動するボランティア団体を支援するため創設した「阪神大震災ボランティアサポート制度」において、「震災・まちのアーカイブ」が2003年度の支援対象団体に選ばれました。(事務局より)

編集後記 ■区切りの15号ということでレイアウトなどを新たにしました。表紙写真は、三宮センター街(神戸市中央区)にある震災モニュメント像「讃太陽」です■瓦版を発行すると『アーカイブ前史』の制作が本格化します。しばらく瓦版に載せられなかった日々の活動の成果が『前史』で示されると思われます■アーカイブの最寄り駅は、神戸高速鉄道の高速長田駅とJR神戸線の兵庫駅です。いずれの駅からも徒歩15分程度かかります。第1・3木曜日と第2・4土曜日が開室日(10時から17時まで)です。資料の閲覧を希望される場合などは事前にご連絡下されば幸いです■15時を過ぎると、「さんびん茶」の香りが事務所に漂います。メンバーは、それを飲んでからもうひと頑張り。3月に訪れた沖縄の余韻がいまだに残っています■7月から9月の間に佐倉(千葉)や水俣への訪問が予定されています。めまぐるしい夏になりそうです。(S)

「瓦版なまず」第15号 2003年6月5日発行

発行人 季村 範江 編集人 菅 祥明

震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町1-11-4 神港金属(株)内

TEL 078-681-6231 FAX 078-681-6232 E-mail archives\_kobe@nifty

URL [http://homepage2.nifty.com/archives\\_kobe/](http://homepage2.nifty.com/archives_kobe/)

震災当時の  
情報記録

# CD-ROMで発売

ボランティアら「教訓を後世へ」

著作権者の要請により、  
見出し以外はweb公開  
していません

支援活動の記録  
CDに収め販売

きよから神戸の団体

震災直後の神戸を拠点に、  
全国から訪れたボランティア  
のコーディネートを担当した団

体「中央区ボランティア」の  
活動記録を、主婦や大学講師

らで組織するボランティア団  
体「震災・まちのアーカイ

ブ」がCD-ROMにまと  
め、25日から販売する。収め

られた資料約150点から  
は、時間の経過とともに変化

する被災地のニーズや、取扱  
住所の問題点など、被災地の

姿が読みとれる。

中央区ボランティア（現在  
の中央区ボランティアセンタ

）の震災後約3カ月間の活  
動記録を紹介。収録されてい

る資料の一部のミニコミ紙は  
英語版やハンガール版もあり、

物資の配給情報、洗濯や宿泊  
ができる場所などを掲載、避

難所には毎日配られたもの  
だ。資料全体の目録も作り、

同団体の活動の全体像がつか  
めるように配慮した。

製作した「震災・まちのア  
ーカイブ」の歩みをつづけた

本とセットで千円。神戸市中

央区元町通3丁自の海文堂書  
店（078・3301・0000

）にて販売する。

# 神戸のボランティア団体 震災の記録 CDに集約

きょうから発売

阪神・淡路大震災の記録と記憶の伝承に取り組む神戸市内の市民グループが、当時のボランティア活動の資料などを集めたCD-ROMをつくった。

被災地からの新しい情報発信手段として同グループが考案。避難所に張り出されたミニコミ誌や、市への要請書など計約百五十点を収めた。

ボランティア「震災・まちのアーカイブ」(季村範江代表、十人)。一九九八年から震災ボランティアの活動記録などの提供を呼び掛け、これまで計三百団体分の資料を集めたという。今回、デジタル化したCD-ROMをいくつかの

「中央区ボランティア」の

「」の資料。区役所を拠点にした活動が保存され、避難所連絡会議の資料や、ハンズルや英語のミニコミ誌のほか、目録も付けている。

季村代表は「震災の記憶は徐々に薄れつつあり、他の記録もCD化し被災地内外に発信したい」と話している。

CDは二十五日から神戸中央区元町通三、海文堂書店で発売。一部千円。季村さん078・781・8891

2003年(平成15年)10月25日(土曜日) 青 菅 業新 屋県



▼：阪神大震災後のボランティアの足跡を辿って

震災の記憶を伝えようと、神戸市内の市民団体や、避難所で配られていた被災者向け情報チラシなどを収録したCDを作った。25日から市内の書店などに並ぶ。

▼：震災記録の保存に取り組み「震災・まちのアーカイブ」(季村範江代表)が当時のボランティアが残した1995年11月の資料や写真約150点をまとめた。

▼：発生直後は臨時給水栓や救護室の場所を知らせる内容が、約3か月後にはストレス相談や避難所の手供向けイベント案内にならなく、変化の様子をたどる。季村代表は「当時の懐かしいを感じてほしい」と話している。

「瓦版なまず」号外 2003年10月25日発行

発行人 季村 範江 編集人 菅 祥明

### 震災・まちのアーカイブ

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町1-11-4 神港金属(株)内  
TEL 078-681-6231 FAX 078-681-6232 E-mail archives\_kobe@nifty  
URL [http://homepage2.nifty.com/archives\\_kobe/](http://homepage2.nifty.com/archives_kobe/)